

R. イングルハート (R. Inglehart) の「世界価値観調査 (World Values Survey) データ」の二次分析のための準備作業（2）*

真 鍋 一 史**
栗 田 真 樹***
加 藤 敬 子****

I はじめに

筆者は、1995年4月から9月までの半年間、米国ミシガン大学 (The University of Michigan) に、日本研究センター (Center for Japanese Studies) の客員教授——トヨタ自動車の資金提供にもとづいて設立された制度である Toyota Visiting Professor——として招聘され、大学院において「日本の社会・世論・コミュニケーション」と題する日本社会論のクラスを担当した。いうまでもなく、ミシガン大学は、ハーバード、イェール、コロンビア、ワシントン、カリフォルニア、スタンフォードと並ぶ米国における日本研究の主要大学のひとつであり、日本研究センター内には Association for Asian Studies の事務局も置かれている。しかしミシガン大学は日本研究だけで世界に名を馳せたわけではない。残念ながら、日本研究は、社会科学の全体のなかでは未だマイナーな存在にとどまるといわなければならぬ。じつはミシgan大学が社会科学の領域で広く知られるようになった背景には、Survey Research Center, Research Center for Group Dynamics, Center for Political Studies の3つの部門を擁する Institute for Social Research の活躍があった。これら3つの部門については、すでにさまざまな紹介や解説が書かれている。ここでの問題関心からやや距離のある Group Dynamics についてはしばらく置くとして、まず Survey Research Center については、Jean M. Con-

verse, Survey Research in the United States : Roots and Emergence 1890–1960, University of California Press, 1987 がその興味深い案内書となっている。この本ではアメリカにおける Survey Research の歴史が多面的に跡づけられているが、The Survey Research Center at Michigan と題する章をとくに設けて、ミシガン大学における社会調査の足跡と研究の系譜について詳細に記している。

つぎに Center for Political Studies については、アメリカ政治学会におけるミシガ大学の評価から始めなければならない。William Crotty 編の Political Science : Looking to the Future (Volume one, Two and Three), Northwestern University Press, 1991 によれば、政治学の領域のトップ10のなかにつきの3つのグループが常に位置付けられてきたという。それは、①イェール、ハーバード、MIT、②ミシガン、シカゴ、ウィスコンシン、ミネソタ、③バークレイ、スタンフォード、の3つのグループである。それでは、ミシガ大学がなぜこのように高い評価を獲得したのかというと、それはデータの収集・蓄積・解析における貢献が広く認められるようになってきたからにほかならない。そして、まさに、この点において、Center for Political Studies と、現在そこに本部を置く Inter-University Consortium for Political and Social Research には面目躍如たるものがあった。ICPSR は、当初 Survey Research Center に置かれ、全米21大学とのコンソーシアムの形で発足したデータライブラリーで

*キーワード：二次的分析、最頻値分析、アイテムリスト

**関西学院大学社会学部教授

***吉備国際大学社会学部講師

****関西学院大学社会学部兼任講師

あるが、その後CPSに移り、①コンソーシアムに参加する大学の数が着実に増加した、②所有するデータは世界130か国にもわたるものとなった、③データの収集・蓄積・利用ばかりでなく、独自調査の実施・データの作成も進められてきた——1940年代から始められた大統領選挙調査は、それが継続調査であるということと、この調査データにもとづいて社会科学の領域における記念碑的な著書（たとえば A. Campbell, G. Gurin and W. E. Miller, *The Voter Decides*, Row, Peterson and Company, (1954). A. Campbell, P. E. Converse, W. E. Miller and D. E. Stokes, *The American Voter*, John Wiley (1960) など）が上梓されてきたという点が特筆される——、④統計手法・解析技法を開発（たとえばデータ解析用のパッケージ OSIRIS の開発——OSIRIS IV : User's Manual, Eighth Edition, Survey Research Center, Computing Section, Institute for Social Research, 1992——など）するとともに計量的手法についてのトレーニング・プログラム（たとえば夏学期の集中講座など）も推進してきた、というようによくまさに飛躍的な発展をとげてきた。ICPSR の活動の意義については、1987年に創立25周年を記念して出版された Heinz Eulau 編の *Crossroads of Social Science*, Agathon Press (1989) がきわめて重要な文献としてあげられるであろう。

さて、話をもとにもどすならば、筆者が招聘を受けたミシガン大学というのは、このように恵まれた環境にあった。しかし筆者にとってのさらなる幸運は、そのISR/CPSに兼任研究員という資格で研究室があたえられ、それが契機となって、現在世界的に注目されている「世界価値観調査 (World Values Survey)」を主宰する Ronald Inglehart 教授と共同研究を始めることができたということである。こうして始められた共同研究の具体的な内容は、「世界価値観調査データ」の①共同利用のための準備作業と、②二次的分析 (Secondary Analysis) の試み、の2点にまとめられる。まず①については、このような作業は多人なエネルギーと時間を要するものであり、とても個々の研究者が単独で取り込めるようなものではない。そこで、ひとまず日本側においてチームを構成し、第一段階の作業にとりかかった。その

最初の成果が、「R. イングルハート (R. Inglehart) の『世界価値観調査 (World Values Survey) データ』の二次分析のための準備作業」(『関西学院大学社会学部紀要』第75号、1996年10月) であった。つぎに②については、さまざまな可能性が考えられるなかで、R. Inglehart 教授と筆者の問題関心の重なるテーマとして「Subjective Well-Being」という課題を選び、その国際比較という視点からの分析を進めることにした。その第一段階の成果が、1996年5月25日と26日の両日、吉備国際大学を主催校として開催された第47回関西社会学会において筆者が発表した「Well-Being の構造の国際比較——R. Inglehart 『世界価値観調査データ』による検証——」であった。

なお、このような二次的分析の試みを進めるにあたっては、そのための方法論の検討といったことも重要である。この点については、Herbert H. Hyman, *Secondary Analysis of Sample Surveys*, Wiley, 1972, Wesleyan University Press, 1987 が、この領域における、示唆に富んだ古典として現在でも意味をもち続けており、その内容の再検討という作業もきわめて重要な今後の課題といえるということを記しておきたい。

最後に、以上の①と②の共同作業が、日本リサーチセンター、日経リサーチ、原子力安全システム研究所からの研究助成にもとづいて行われたことも付記しておかなければならぬ。
(真鍋一史)

II R. Inglehart による分析の問題点

1 分析の問題点

1) R. Inglehart による分析

R. Inglehart は43か国の調査データの48変数を用い、因子分析によって Survival Values↔Well-being Values、Traditional Authority↔Rational-Legal Authority という二つの因子（次元）を抽出している（図1）。さらに、これら二つの次元に関して、その因子負荷量の平均値 (mean) を用いて各国をプロットしている（図2：真鍋・栗田・劉・加藤・李、1996）。

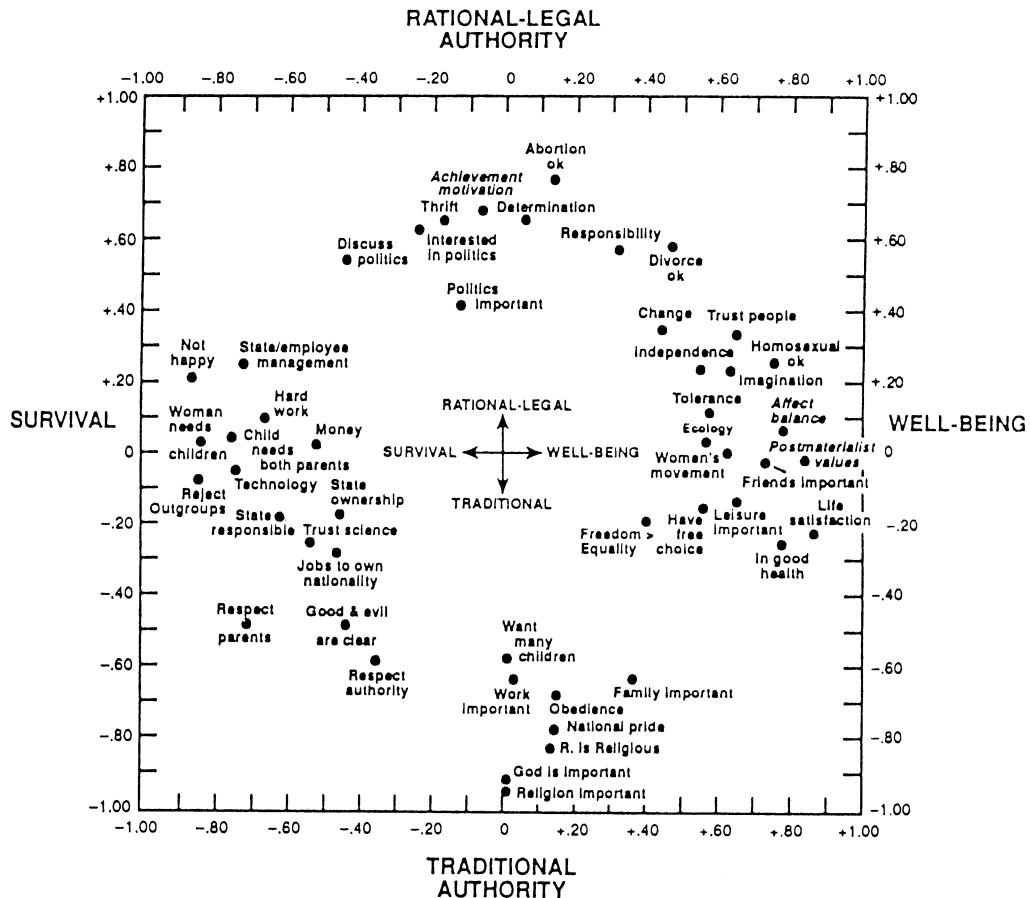


図1 43か国の調査データの因子分析の結果

Source : 1990-1991 World Values survey. This figure shows the first and second principal components emerging from a factor analysis of data from representative national surveys of 40 societies, aggregated to the national level. The scales on the margins show each item's loadings on the two respective dimensions. The items in italicics multi-item indices.

2) 分析手順の問題

図1の分析に用いられた48変数が選択された手続きをはじめ、43か国のデータをどのように処理したのかについての情報がない。Inglehartによって準備されたコードブックにおいても、いくつかの情報が欠落している。そのため、図1をはじめ図2に関してもデータを再分析することができず、データ解析を「試行錯誤」で追試していかなければならないという問題点が存在するのである。

また、図1では48変数が変数ラベルでプロットされているが、これがどの質問項目と対応しているのかが明らかではない。世界価値観調査では類

似の質問項目がいくつか設定されており、どの項目を用いたのかが特定できない。ほとんどの項目は特定できるが、データの二次的分析のために、項目とラベルとの対応関係がぜひとも必要である。48変数のうち、ChangeとEcologyについては、どの項目が用いられたのかが特定できない。

48変数のうち4つの変数（Achievement motivation、Affect balance、Postmaterialist values、Reject Outgroups）は質問項目をそのまま用いるのではなく、いくつかの項目によって尺度が構成されている。世界価値観調査データには、すでに構成された尺度が調査票に設定された

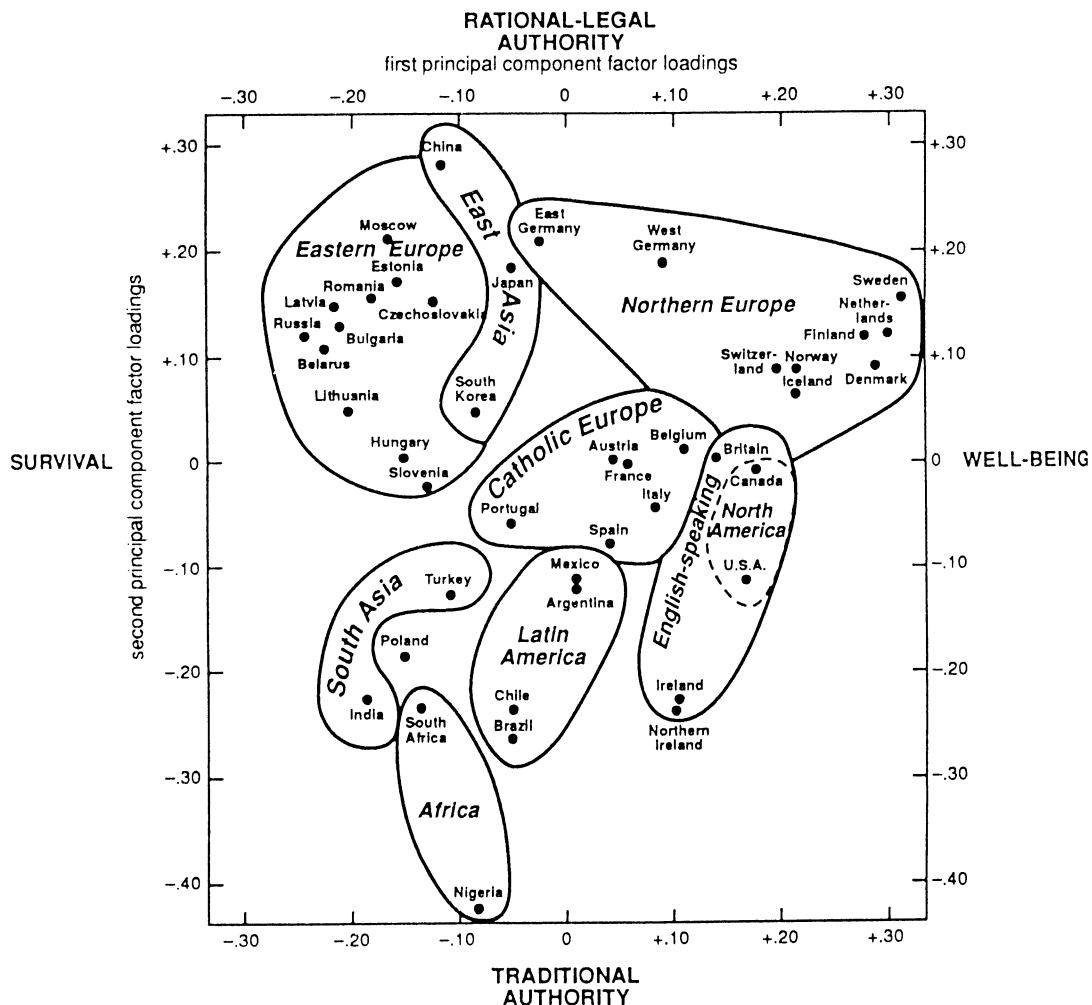


図2 二つの次元（軸）における各国の位置

Source : 1990-1991 World Values survey. Positions are based on the mean scores of the publics of the gisen nation on each of the two dimensions.

質問項目に加えて新たな変数としてデータ化されており、うえの4つの変数も含まれている。尺度についてInglehartによるコードブックに尺度構成の手続きが記されているが、これらには構成上のいくつかの問題点が残されている。これらの問題点についての詳しい議論については別稿に譲ることとして、48（変数）-4（尺度）-2（不明項目）=42変数を、ここでは分析の対象とする。

3) 国別分析の必要性

図1において、Inglehartは個別データではなく、国別のアグリゲート・データによって分析し

ている。これは、各国の標本が世界の人口構成比をもとに、とられたものでないためである。たとえば、人口が1億2千万人の日本の標本数は1011であり、12億人と言われる中国の標本は1000である。また、スペインは一国で4000以上の標本がとられている。これらをひとまとめにし「世界市民」として分析するには、標本構成比の高い特定の国の回答に全体の回答が引っ張られるという問題がある。そのため、「国家」という変数を説明変数と考えるならば、国別に分析したデータをひとまとめにし、アグリゲート・データを再分析するという方法をとることが「合理的」である。その意味

では、図2で因子負荷量の「国別」平均値を用いた点には合理性がある。しかしながら、43か国を一度に分析する際には、各国の因子分析を試み、国別に特別な位置にプロットされるようないわゆる「はずれ変数」に関しては、国際比較という視点から分析の対象から外していくという作業が必要になる。つまり、43か国に共通し、なおかつ特定の国での回答が特異でない項目を分析に用いるべきなのである。

ここで、国別に分析する手続きが必要な例を一つ挙げることにする。日本調査において「問29a）あなたは、現在、何か宗教をお持ちですか。」という問い合わせ（国際比較ではV143に相当）が設定されているが、raw dataにおいてはすべて欠損値（値は0）となっている。つまり、この変数をそのまま分析に用いるとすれば、日本においては宗教が変数として用いられなかったということになる。他にも国によって設定されていない変数があるが、このような場合にはどのようなデータ解析上の措置が講じられたのかが明らかにされていない。日

本では宗教の変数がはずされて分析されたのか、それとも日本の標本がすべてはずされたのか、それとも他の変数から新しく変数を構成して宗教の変数の代わりに用いたのかが明らかではないのである。

2 国別の回答の特徴

そこで、これら42の変数について、各國がどのような特徴を持っているのかについて、モード（最頻値）を用いて比較することにする。モードを用いるのは、「はずれ値」による影響が少ないためである。しかしながら、モードは一般にカテゴリーの数に影響されやすい。また、分布を見たときにモードが他の値よりどれだけ高いのか、つまりそれがモードといえるかどうかを把握しておく必要がある。また、統計解析パッケージを使う際のテクニカルな問題として、計算されるモードは、たとえモードが2つ以上あろうと通常1つの値のみが出力されるという問題も指摘できる¹⁾。

- 1) 以下のデータは、ホーエルの『初等統計学』で用いられた「高校の評定平均」と「大学1年次の評定平均」のうち、「高校の評定平均(HIGH)」をSPSSによって度数分析(frequencies)した結果である。

HIGH

Value Label	Value	Frequency	Percent	Valid Percent	Cum Percent
	2.8	1	3.3	3.3	3.3
	2.9	1	3.3	3.3	6.7
	3.0	2	6.7	6.7	13.3
	3.1	1	3.3	3.3	16.7
	3.2	4	13.3	13.3	30.0
	3.3	4	13.3	13.3	43.3
	3.4	4	13.3	13.3	56.7
	3.5	2	6.7	6.7	63.3
	3.6	4	13.3	13.3	76.7
	3.7	2	6.7	6.7	83.3
	3.8	2	6.7	6.7	90.0
	3.9	1	3.3	3.3	93.3
	4.1	1	3.3	3.3	96.7
	4.3	1	3.3	3.3	100.0
<hr/>					
	Total	30	100.0	100.0	
Mean	3.437	Std err	.063	Median	3.400
Mode	3.200	Std dev	.343	Variance	.118
Kurtosis	.312	S E Kurt	.833	Skewness	462
S E Skew	.427	Range	1.500	Minimum	2.800
Maximum	4.300	Sum	103.100		
<hr/>					
*Multiple modes exist. The smallest value is shown.					
Valid cases	30	Missing cases	0		

Japan		Sweden		S.Korea		11国合計	
mode	percent	mode	percent	mode	percent	mode	percent
1/2	40/44	1	57	1	59	1	53
1	78	1	87	1	93	1	31
2	57	1	59	1	52	1/2	42/43
2	58	1	55	2	54	2	42
2/3	40/42	2/3	35/40	2	40	2/3	29/34
3	47	3/4	39/34	3	35	1	31
2	50	2	61	2	69	2	54
2	51	2	39			2	39
2	65	2	55	2	69	2	53
3	47	1	45			2	34
2	58	1	56	2	66	2	59
6/7/8	22/20/24	8	30	8	24	8	21
10	39	9	36	8/9/10	19/15/17	5/7/8/9/10	8/8/10/8/13
1/2	44/47	2	64	2	68	2	40
1	65	2	57	1	72	1	54
3	74	3	76	3	71	3	55
		1	82	1	72	1	69
5/6	18/21	1	36			10	29
3	53	2	56	2	61	2	49
1	95	1	85			1	83
1	75	2	79	1	76	1	58
1	78	1/2	51/49	1	94	1	72
1	84	1	89	1	91	1	72
2	76	2	60	2	94	2	79
1	60	1	91	1	55	1	69
2	60	1/2	48/52	1	53	2	61
1	59	2	67	2	69	2	64
2	90	2	75	2	82	2	65
2	51	3	43	2	57	2	39
1	46	1	67	1	51	1	52
5	32	5	26	1/3/5	15/13/18	1/5	16/21
10	22	1	27	1	22	1/5	19/14
1	41	1	66	1	63	1	56
3	81	3	59	3	75	3	68
1	65	1/3	35/40	1	90	1	74
3	77	3	60	3	69	1	50
2	67	1	47	2	57	1	52
2	50	2	56	2	46	2	40
1	60	1	37	1	90	1	65
1	28	5	21	6	58	1	31
5	26	5/10	23/18	6	58	1/5	24/22
2	37	1/2	41/43	1	45	1	47
1011		1047		1251		16495	

China		Russia		11国合計	
mode	percent	mode	percent	mode	percent
1	64	1	46	1	60
1	62	1	79	1	81
2	52	2	48	1/2	42/43
3	49	2	43	2	42
1/2/3	29/30/33	3	42	2/3	29/34
4	78	3/4	32/34	1	31
2	61	2	51	2	54
2	48	2	34	2	39
2	40	2/3	46/44	2	53
3	39	3	56	2	34
1	60	2	63	2	59
3	24	5	20	8	21
6/9	14/17	5/7/8/10	14/11/13/10	5/7/8/9/10	8/8/10/8/13
2	40	4	58	2	40
1	65	1	63	1	64
3	52	3	63	3	55
2	96	2	63	1	69
1	79	1	32	10	29
2	57	2	45	2	49
1	98	1	97	1	83
2	54	1	92	1	58
1	75	1	76	1	72
1	57	1	70	1	72
2	73	2	89	2	79
1	52	1	70	1	59
1	56	1	61	2	51
2	55	2	60	2	64
2	92	2	74	2	65
2	42	2	43	2	39
2	65	1/2	45/48	1	52
8/10	19/20	5/10	21/16	1/5	16/21
1/3/5/6/8/10	15/11/14/11/10/11	5	21	1/5	19/14
1	67	1/3	41/43	1	56
3	79	3	53	3	68
1	95	1	84	1	74
2/3	40/35	1	68	1	50
1	58	1	60	1	52
2	52	1	49	2	40
1	92	1	88	1	65
5/6	32/27	5	31	1	31
5	32	5	34	1/5	24/22
1/2	43/39	2	39	1	47
1000		1961		16495	

そこで、他のカテゴリーよりも5%以上差のあるものをモードとして示し、モードとの差が5%以内であれば準モードとしてあげることにする。

図2においてプロットされている各国は、結局、既存の枠組によって「事後解釈」的に分類されている。43か国すべてを分析対象とするには、多大な労力が必要になるため、以下の11か国を便宜的に各地域の代表国として分析を進めることにする。

地域	国(コード番号)	実数
Catholic Europe	France (01)	1002
Northern Europe	West Germany (03)	2101
	Sweden (19)	1047
Eastern Europe	Russia (50)	1961
English-speaking	U. S. A. (11)	1839
Latin America	Brazil (28)	1782
Africa	Nigeria (29)	1001
East Asia	Japan (13)	1011
	S. Korea (24)	1251
	China (39)	1000
South Asia	India (32)	2500

さらに、それぞれの国で回答がどのような分布の形を取っているのかを見ることにする。つまり、これらの項目の分布が国によってどのように異なるのかを把握しておく必要がある。これは「はずれ変数」を見つける作業ともいえるであろう。

表1は縦軸に42変数、横軸に11か国をとっている。縦軸はコードブックの英語調査票に付された変数の順に、横軸の11か国は国のコードの昇順に並べている。各国の列は、左列はモード、準モードを値の小さいものから並べている。右列はそれに対応するパーセンテージを示している。

1) v4 「重要度：仕事」(図3-1)

「非常に重要」「かなり重要」「あまり重要でない」「全く重要でない」「わからない」のカテゴリーに分けられている(以下、v5-v9同様)。ここでの分析では、「わからない」はすべて欠損値とする。

「非常に重要」が最も多く、「全く重要でない」が最も少ない右下がりの分布を示している国は、フランス、アメリカ、スウェーデン、韓国、中国、

ロシアである。

「非常に重要」が非常に多く、「あまり重要でない」「全く重要でない」がほとんど見られないのは、ブラジル、ナイジェリア、インドである。

「かなり重要」にモードがあり、「非常に重要」「あまり重要でない」「全く重要でない」の順に回答が分布している国は、西ドイツ、日本である。

2) v5 「重要度：家族」(図3-2)

いずれの国も「非常に重要」にモードがあるが、このモードが80%以下の国は西ドイツ、日本、インド、中国、ロシアである。とくに中国は62%と他国と比べて低い値を示している。

3) v6 「重要度：友人」(図3-3)

「非常に重要」が最も多く、右下がりの分布を示している国は、アメリカ、スウェーデン、韓国、ブラジル、ナイジェリアである。

「かなり重要」をモードにして、次に「非常に重要」が多く分布している国は、フランス、西ドイツ、日本、インド、ロシアである。中国は「かなり重要」にモードがあるが、次に多いカテゴリーは「あまり重要でない」である。

4) v7 「重要度：余暇」(図3-4)

「非常に重要」をモードとし、右下がりの分布を示している国は、スウェーデン、ブラジル、ナイジェリアである。

「かなり重要」をモードにして、次に「非常に重要」が多く分布している国は、フランス、日本、韓国である。インドは「かなり重要」をモードとして「あまり重要でない」「非常に重要」の順に分布している。

「非常に重要」「かなり重要」のパーセンテージにほとんど差がなく「2つのモードがあるバイモードの分布」になっている国は、西ドイツとアメリカである。

中国は「あまり重要でない」をモードに「かなり重要」「非常に重要」の順に分布している。

5) v8 「重要度：政治」(図3-5)

「かなり重要」「あまり重要でない」にバイモードがある国は、アメリカ、日本、スウェーデンで

ある。

「あまり重要でない」「全く重要でない」にバイモードがある国は、フランス、ナイジェリアである。

「あまり重要でない」にモードがある国は、西ドイツ、ロシアである。

韓国は「かなり重要」にモードがある。

インドは「かなり重要」「あまり重要でない」「全く重要でない」という3つのモードがある。

中国は「非常に重要」「かなり重要」「あまり重要でない」の3つのモードがある。

6) v9 「重要度：宗教」(図3-6)

「非常に重要」をモードに右下がりの分布を示している国は、アメリカ、ブラジル、ナイジェリア、インドである。

逆に「全く重要でない」をモードにして右上がりの分布を示しているのは、中国である。ロシアは右上がりの分布だが、「あまり重要でない」「全く重要でない」がバイモードになっている。

「あまり重要でない」にモードがある国は、西ドイツ、日本、韓国である。スウェーデンは「あまり重要でない」「全く重要でない」がバイモードになっている。

フランスは、「かなり重要」「あまり重要でない」「全く重要でない」の3つがモードになっている。

7) v10 「政治の会話」(図3-7)

V10においては、「1 よくする」「2 ときどきする」「3 しない」のカテゴリーに分けられている。フランス、西ドイツで「3」という値がローデータに存在しない。しかし、フランス調査票において設定されている値は1、2、3、9（わからない）である。また、西ドイツ調査票においても、1、2、3、4のコードが設定されているが、「3」という回答者はいない。ここでは、「4」は「3」に再コードせずにそのまま用いることにする。

ブラジルは「しない」にモードがあり、右上がりの分布を示している。

ブラジルを除いて、すべての国で「ときどきする」にモードがある。「よくする」と「しない」を比べると「よくする」の方が多い国は、西ドイツ、韓国、中国、ロシアである。「しない」の方が多い

国は、フランス、アメリカ、日本、スウェーデン、ナイジェリア、インドである。

8) v11 「自己意見の説得」(図3-8)

自分の意見に他者を従わせようとするかどうかについての項目である。韓国調査においては設定されていない。回答のカテゴリーは「よくある」「ときどきある」「ほとんどない」「全くない」である。

すべての国において、「ときどきある」をモードとして右に偏った分布を示している。フランスとブラジルにおいて、「ほとんどない」よりも「全くない」の方が多くなっている。

9) v18 「幸福感」(図3-9)

「とても幸せ」「かなり幸せ」「あまり幸せではない」「全く幸せではない」という回答のカテゴリーが設定されている。

モードのパーセンテージに差が見られるが、ナイジェリア、ロシアを除いて、「かなり幸せ」にモードがある。

ナイジェリアは、「非常に幸せ」をモードとした右下がりの分布を示している。

ロシアは、「かなり幸せ」「あまり幸せではない」の2つのカテゴリーにモードがある。

10) v83 「健康状態」(図3-10)

「非常によい」「よい」「まあよい」「よくない」「非常によくない」という回答のカテゴリーが設定されている。韓国調査では項目が設定されていない。

スウェーデンは「非常によい」をモードとして、右下がりの分布を示している。アメリカ、ナイジェリアは、「非常によい」「よい」がバイモードになっているが、これも右下がりの分布を示している。

「よい」にモードがある国は、フランス、西ドイツ、ブラジル、インドである。

「まあよい」にモードがある国は、日本、ロシアである。

中国は、「まあよい」にモードがあるが、次に多い回答は「非常によい」となっている。

11) v94「人は信用・用心」(図3-11)

人は信用できるか、それとも用心しなければならないかを尋ねる項目である。回答のカテゴリーは「だいたい信用できる」と「用心するにこしたことではない」である。

「用心することにこしたことない」の方が多い国は、フランス、西ドイツ、日本、韓国、ブラジル、ナイジェリア、インド、ロシアである。

「だいたい信用できる」が多い国は、スウェーデンと中国である。

アメリカでは、両者はほとんど差がない。

12) v96「生活満足度」(図3-12)

現在の生活にどの程度満足しているかを尋ねる項目である。回答のカテゴリーは「1 不満」と「10 満足」を両端とする10段階のカテゴリーが用意されている。カテゴリーの数が多くなれば、モードが複数になる可能性が高くなる。よって、ここでは細かくカテゴリーを見していくのではなく、おおまかな分布で11か国を比較することにする。

「8」をモード（準モードを含む）とした山形の分布を示している国は、フランス、西ドイツ、アメリカ、日本、スウェーデン、韓国、中国である。

「10」をモードとして右上がりの分布を示しているのは、ブラジル、ナイジェリアである。

「5」をモードとして多少凹凸はあるがなだらかな山形の分布を描いているのは、インドとロシアである。

13) v117「仕事における意思決定の自由」

(図3-13)

仕事上の意志決定をどの程度自由にできるかどうかを尋ねる項目である。「1 全く自由はない」から「10 大いに自由がある」までの10段階の回答のカテゴリーが設けられている。

「8」「9」「10」にモード（準モードを含む）があり、右に偏った山形の分布、右上がりの分布を示している国は、フランス、西ドイツ、アメリカ、日本、スウェーデン、韓国、ブラジル、ナイジェリア、インドである。とくに、ブラジルと日本は「10」が非常に多い。

中国とロシアでは、平坦な山形の分布を示して

いる。

14) v126「企業経営のあり方」(図3-14)

企業経営の在り方に関する項目では、「オーナーが自ら企業を経営するか、経営者を任命すべき」「オーナーと従業員が一緒になって経営者を選出すべき」「国家がオーナーとなって経営者を任命すべき」「従業員が企業を所有すべきで、経営者を選出すべき」の4つのカテゴリーが設定されている。

「オーナーが自ら企業を経営するか、経営者を任命すべき」がモードの国は、アメリカ、ナイジェリアである。

「オーナーと従業員が一緒になって経営者を選出すべき」がモードの国は、フランス、韓国、ブラジル、インド、中国である。

「国家がオーナーとなって経営者を任命すべき」がモードとなっている国はない。

「従業員が企業を所有すべきで、経営者を選出すべき」がモードの国はロシアである。

西ドイツと日本では、「オーナーが自ら企業を経営するか、経営者を任命すべき」「オーナーと従業員が一緒になって経営者を選出すべき」がバイモードになっている。

15) v130「自国民の雇用の優先」(図3-15)

「仕事が少ない場合、雇用者は外国人労働者よりも自国民を優先すべきだ」という意見に「賛成」か「反対」か「どちらでもない」かを尋ねる項目である。

ほとんどの国で「賛成」「反対」「どちらでもない」の順に回答が多い。しかし、日本では、モードが「賛成」なのは同じであるが「どちらでもない」の回答の割合が「反対」を上回っている。

スウェーデンでは、「反対」が最も多く、ついで「賛成」「どちらともいえない」の順となっている。

16) v142「善悪の価値基準」(図3-16)

「善と悪にははっきりとした価値基準がある」というAの意見に賛成か、それとも「善と悪には明白な基準はありえない」というBの意見に賛成かを尋ねる項目である。回答のカテゴリーは「Aの意見（に賛成）」「Bの意見（に賛成）」「どちらに

も賛成できない」である。

「どちらにも賛成できない」という回答はいずれの国でも少ない。

「A の意見（に賛成）」の方が多い国は、ナイジェリアである。アメリカは、「A の意見（に賛成）」「B の意見（に賛成）」はほとんど差がなく、バイモードになっている。

他の国は「B の意見（に賛成）」の方が多い。

17) v143 「宗教の有無」(図 3-17)

現在、何か宗教を持っているかどうかを尋ねる項目である。回答のカテゴリーは「はい」か「いいえ」である。日本調査においては、この項目は調査票には設定されているが、「世界価値観調査データ」には欠損値しか入力されていない。よって、日本のこの変数に関するデータは、次の v144（現在の宗教名）に答えているかどうかで新たなる変数を構成するというような方法を用いなければならない。

宗教を持っていない（「いいえ」）が多い国は、中国とロシアである。その他の国はいずれも宗教を持っている（「はい」）の回答の方が多い。

18) v176 「神の重要度」(図 3-18)

「あなたの生活にとって神はどの程度重要か」を尋ねる項目である。回答のカテゴリーは「1 全く重要でない」から「10 非常に重要」までの10段階のカテゴリーが用意されている。韓国調査においては、この項目は設定されていない。

「全く重要でない」にモードがあり、右下がりの分布を示している国は、フランス、スウェーデン、中国、ロシアである。とくに中国のモードは突出している。

逆に「非常に重要」にモードがあり、右上がりの分布を示している国は、アメリカ、ブラジル、ナイジェリア、インドである。とくに、ブラジル、インドのモードは突出している。

なだらかな山形を描いている国は、西ドイツと日本である。

19) v213 「理想の子どもの数」(図 3-19)

「夫婦の間に何人の子どもが居るのが理想だと思いますか」という項目である。回答のカテゴ

リーは、「0 子どもはいらない」「1 1人」から「10 10人以上」までとなっている。

「2 人」がモードとなっている国は、西ドイツ、アメリカ、スウェーデン、韓国、ブラジル、インド、中国、ロシアである。

フランスは「2 人」「3 人」がバイモードになっている。

日本は「3 人」、ナイジェリアは「4 人」がモードになっている。

20) v214 「子どもには両親が必要」(図 3-20)

「子どもが幸せに成長するには父親と母親の両方いる家庭が必要である」という意見に賛成か反対かを尋ねる問い合わせである。回答のカテゴリーは「どちらかといえば賛成」と「どちらかといえば反対」である。韓国調査においては項目が設定されていない。

いずれの国においても、「どちらかといえば賛成」が多い。しかし、アメリカでは他の国と比較して「どちらかといえば反対」という回答が多い。

21) v215 「女性には子どもが必要」(図 3-21)

「女性が充実した生活を送るには、子供を持たなければならぬと思いますか、それとも子供を持たなくとも充実した生活を送れると思いますか」という問い合わせに対して、「子供が必要」「必要ない」というカテゴリーが設けられている。

「子供が必要」の方が多くの国は、フランス、日本、韓国、ナイジェリア、インド、ロシアである。

それに対して「必要ない」の方が多くの国は、西ドイツ、アメリカ、スウェーデンである。

22) v224 「子どもは親を尊敬」(図 3-22)

A：「自分の親にどんな欠点や悪いところがあるても、子供はつねに親を愛し、うやまわなければならぬ」B：「自らの行動と態度によって子供から尊敬も愛情も勝ち取れなかった親には尊敬する必要もないし、愛情も示す必要はない」という2つの意見に対し、「どちらかといえば A に賛成」「どちらかといえば B に賛成」という回答のカテゴリーが設定されている。

スウェーデンを除くすべての国で「どちらかといえば A に賛成」が多い。スウェーデンでは「ど

ちらかといえばAに賛成」「どちらかといえばBに賛成」がほぼ等しく、バイモードになっている。

23) v229「責任感」(図3-23)

「ここに、家庭で子供に身につけさせることのできる性質が列記されています。この中で、あなたが特に大切だと思うものを5つあげて下さい。(5つだけ○印)」という質問11項目の内の一つに「責任感」がある。回答のカテゴリーは「大切である」のみであるので、これに「言及している」か「言及していない」かと表記することにする。

ナイジェリアを除き、いずれも「言及している」が多い。

24) v230「想像力 / 創作力」(図3-24)

v229「責任感」と同様、「家庭で身につけさせることが大切だと思う」11項目の内の一つである。

いずれの国も「言及なし」が多い。

25) v231「寛容性」(図3-25)

「家庭で身につけさせることが大切だと思う」11項目の内の一つである。

いずれの国も「言及あり」が多い。

26) v232「節約性」(図3-26)

「家庭で身につけさせることが大切だと思う」11項目の内の一つである。

「言及あり」が多い国は、韓国、中国、ロシアである。

「言及なし」が多い国は、フランス、西ドイツ、アメリカ、日本、ブラジル、ナイジェリア、インドである。

スウェーデンは「言及あり」「言及なし」の差はほとんどなく、バイモードとなっている。

27) v233「決断力 / 忍耐力」(図3-27)

「家庭で身につけさせることが大切だと思う」11項目の内の一つである。

西ドイツ、日本を除くすべての国で「言及なし」が多い。

日本は「言及あり」が多く、西ドイツは「言及あり」「言及なし」はバイモードになっている。

28) v236「従順さ」(図3-28)

「家庭で身につけさせることが大切だと思う」11項目の内の一つである。

「言及あり」が多い国は、フランス、ナイジェリア、インドである。

「言及なし」が多い国は、西ドイツ、アメリカ、日本、スウェーデン、韓国、ブラジル、中国、ロシアである。

29) v241「政治への関心度」(図3-29)

「あなたは、政治にどの程度関心を持っていますか」という問い合わせに対し、「非常に関心を持っている」「やや関心を持っている」「あまり関心を持っていない」「全く関心を持っていない」の4つのカテゴリーが設けられている。

「やや関心を持っている」をモードとして左に偏った分布を示している国は、西ドイツ、アメリカ、日本、韓国、中国、ロシアである。

スウェーデンは、「あまり関心を持っていない」をモードとして右に偏った分布を示している。

フランスは、「やや関心を持っている」「あまり関心を持っていない」「全く関心を持っていない」の3つのカテゴリーがモードとなっている。

ブラジルは、「やや関心を持っている」「全く関心を持っていない」にバイモードがある。

ナイジェリアは、「全く関心を持っていない」にモードがあり、ほぼ右上がりの分布を示している。

30) v247「自由と平等」(図3-30)

A:「自由の方が平等より大切だと思う」かB:「平等の方が自由よりも大切だと思う」かを尋ねる項目である。回答は「Aに近い」「Bに近い」「どちらでもない」が設けられている。ただしフランス調査では「Aに近い」「Bに近い」の2つのカテゴリーのみである。

A:「自由の方が平等より大切だと思う」にモードがある国は、フランス、西ドイツ、アメリカ、日本、スウェーデン、韓国である。

ブラジルは、B:「平等の方が自由よりも大切だと思う」にモードがある。

インド、ロシアはA・Bに回答の差がみられず、バイモードになっている。

31) v251「企業の所有」(図3-31)

「次にあげるいろいろな問題について、あなたはどのように考えますか。左の意見と全く同じならば「1」、右の意見と全く同じならば「10」とお答え下さい。「2~9」はその間にある意見の強さを示します。」という問い合わせの一つに「企業や産業の私的所有を増やすべきだ」(1)「企業や産業の国家所有を増やすべきだ」(10)という項目が設定されている。

「企業や産業の私的所有を増やすべきだ」(1)にモードがあり、ほぼ右下がりの分布を示している国は、アメリカである。

「企業や産業の国家所有を増やすべきだ」(10)と「8」にバイモードがあり、ほぼ右上がりの分布を示している国は、中国である。

ほぼ中央にモードがあり、やや左(1)に偏った分布を示している国は、フランス、西ドイツ、スウェーデン、韓国である。

日本は、同じくほぼ中央にモードがあり、分布は左右対称に近いかたちの分布を示している。

ブラジル、ナイジェリア、インド、ロシアは「1」、「5」、「10」で3つの峰を持つ山形を示している。ブラジルでは「1」、ナイジェリアでは「10」、インドでは「5」がモードとなっている。

32) v252「責任」(図3-32)

v251「企業の所有」と同様に、「自分のことは自分で面倒を見るよう個人がもっと責任を持つべきだ」(1)「国民皆が安心して暮らせるよう国はもっと責任を持つべきだ」(10)を両端として、10段階の回答のカテゴリーが設けられている。

「自分のことは自分で面倒を見るよう個人がもっと責任を持つべきだ」(1)にモードがあり、ほぼ右下がりの分布を示している国は、フランス、西ドイツ、アメリカ、スウェーデン、韓国である。

日本は、「国民皆が安心して暮らせるよう国はもっと責任を持つべきだ」(10)にモードがあり、ほぼ右上がりの分布を示している。

ブラジル、ナイジェリアは両端に多く回答があり、一方がモードとなっている。ブラジルは、「自分のことは自分で面倒を見るよう個人がもっと責任を持つべきだ」(1)にモードがある。ナイジェ

リアは「国民皆が安心して暮らせるよう国はもっと責任を持つべきだ」(10)にモードがある。

インド、中国、ロシアはほぼ凹凸のないなだらかな山形となっている。インドは、「1」「5」にモードが見られる。中国は「1」「3」「5」「6」「8」「10」にモードがある。ロシアは「5」にモードがある。

33) v264「お金や物にあまり執着しなくなる」(図3-33)

「このカードには、近い将来起こると思われるいろいろな生活様式の変化があげてあります。もし、そういうことが起きた場合、あなたはどう思われますか。よい(好ましい)ことだと思いますか、悪い(好ましくない)ことだと思いますか。それともそういうことが起こっても気にしませんか。それについてお答え下さい。(1つずつ)」の一つの項目として設定されている。

回答カテゴリーは「よいこと」「悪いこと」「気にならない」の3つである。

「よいこと」にモードがある国は、フランス、西ドイツ、アメリカ、日本、スウェーデン、韓国、ブラジル、ナイジェリア、中国である。

インドとロシアは「よいこと」「悪いこと」の差がなく、バイモードになっている。

34) v265「働くことがあまり大切でなくなる」(図3-34)

上記、v264「お金や物にあまり執着しなくなる」と同様、将来の生活様式の変化に関する項目である。

すべての国で「悪いこと」にモードがある。

35) v266「技術開発がより重視される」(図3-35)

同様に、将来の生活様式の変化に関する項目である。

スウェーデンを除くすべての国で、「よいこと」にモードがある。

スウェーデンは、「よいこと」「悪いこと」で差がなく、バイモードとなっている。

36) v268「権威または権力がより尊重される」(図3-36)

同様に、将来の生活様式の変化に関する項目で

ある。

「よいこと」にモードがある国は、フランス、アメリカ、ブラジル、ナイジェリア、インド、ロシアである。

「悪いこと」にモードがある国は、西ドイツ、日本、スウェーデン、韓国である。

中国は「悪いこと」「気にしない」でバイモードとなっている。

37) v271「科学の進歩」(図3-37)

「長期的に考えた場合、科学の進歩は人類の利益となるでしょうか、それとも人類の害となるでしょうか。あなたの考えをお知らせ下さい。」という問い合わせに対し、「利益となる」「害となる」「利益にも害にもなる」の回答のカテゴリーが用いられている。

「利益となる」にモードがある国は、アメリカ、スウェーデン、ブラジル、ナイジェリア、インド、中国、ロシアである。

「害となる」にモードがある国は、西ドイツ、日本である。

フランスは「利益となる」「害となる」にバイモードがある。

38) v294「女性運動」(図3-38)

「いろいろなグループが一般の支持を求めて運動しています。これから読み上げる運動それについて、あなたはよいことと思いますか、よくないことと思いますか。」という問い合わせの一項目として設けられている。「非常によい」「ややよい」「あまりよくない」「非常によくない」というカテゴリーが設けられている。

「非常によい」にモードがあり、ほぼ右下がりの分布を示している国は、ブラジル、ナイジェリア、インド、ロシアである。

「ややよい」にモードがあり、やや左に偏った分布を示しているのは、フランス、西ドイツ、アメリカ、日本、スウェーデン、韓国、中国である。

39) v307「同性愛」(図3-39)

「次のそれぞれについてあなたはどう思われますか。全く正しい（認められる）と思しますか、それとも全く間違っている（認められない）と思

いますか。」の一項目として設定されている。回答のカテゴリーは「全く間違っている（認められない）」(1)から「全く正しい（認められる）」(10)までの10段階である。なお、韓国調査においては3段階のみの回答カテゴリーとなっている。

すべての国で「全く間違っている（認められない）」(1)がモードとなっている。

40) v309「妊娠中絶」(図3-40)

v307「同性愛」と同様、正しいか間違っているかに関する一項目である。

「全く間違っている（認められない）」(1)にモードがあり、ほぼ右下がりの分布を示している国は、アメリカ、日本、ブラジル、ナイジェリア、インドである。

ほぼ中央にモードがあり、山形の分布を示している国は、フランス、西ドイツ、スウェーデン、韓国、中国、ロシアである。

41) v310「離婚」(図3-41)

同様に、正しいか間違っているかに関する一項目である。

「全く間違っている（認められない）」(1)にモードがあり、ほぼ右下がりの分布を示している国は、ブラジル、ナイジェリア、インドである。

ほぼ中央にモードがあり、凹凸はあるものの山形の分布を描いている国は、フランス、西ドイツ、アメリカ、日本、韓国、中国、ロシアである。

スウェーデンは、中央(5)と「全く正しい（認められる）」(10)にバイモードが見られる。

42) v322「自国民としての誇り」(図3-42)

「あなたは日本人（自国民）であることにどのくらい誇りを感じますか」という問い合わせに対して「非常に感じる」「かなり感じる」「あまり感じない」「全く感じない」の回答が設けられている。

「非常に感じる」にモードがあり、ほぼ右下がりの分布を示している国はアメリカ、韓国、ブラジル、ナイジェリア、インドである。

「かなり感じる」にモードがあり、左に偏った山形を描いている国は、フランス、西ドイツ、日本、ロシアである。

スウェーデンと中国は「非常に感じる」「かなり

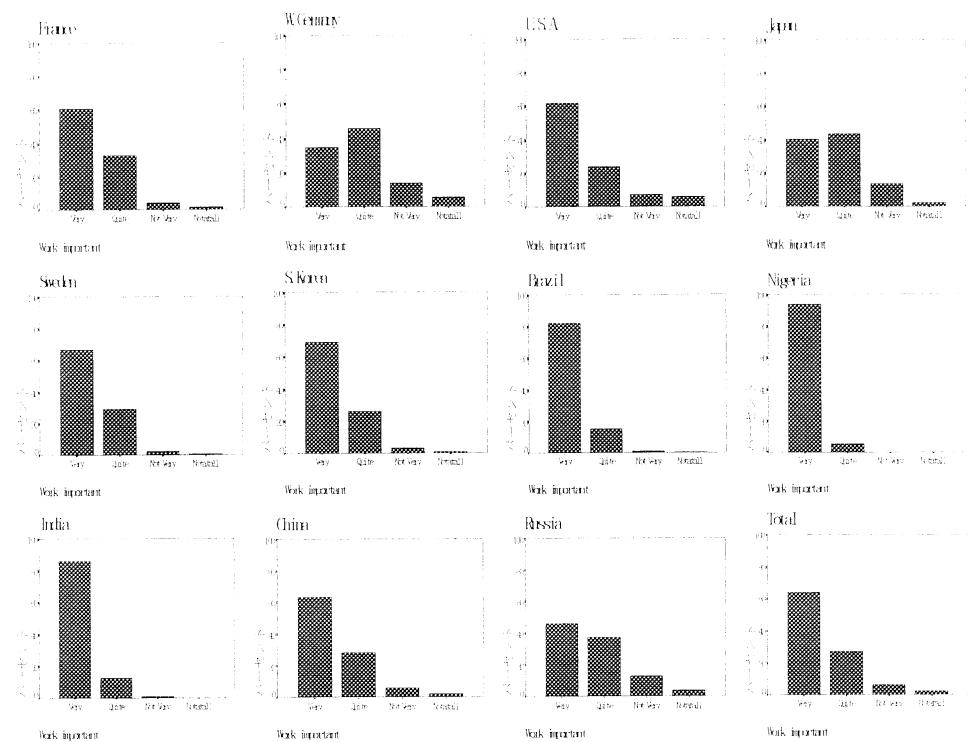


図3-1 v4 「重要度：仕事」

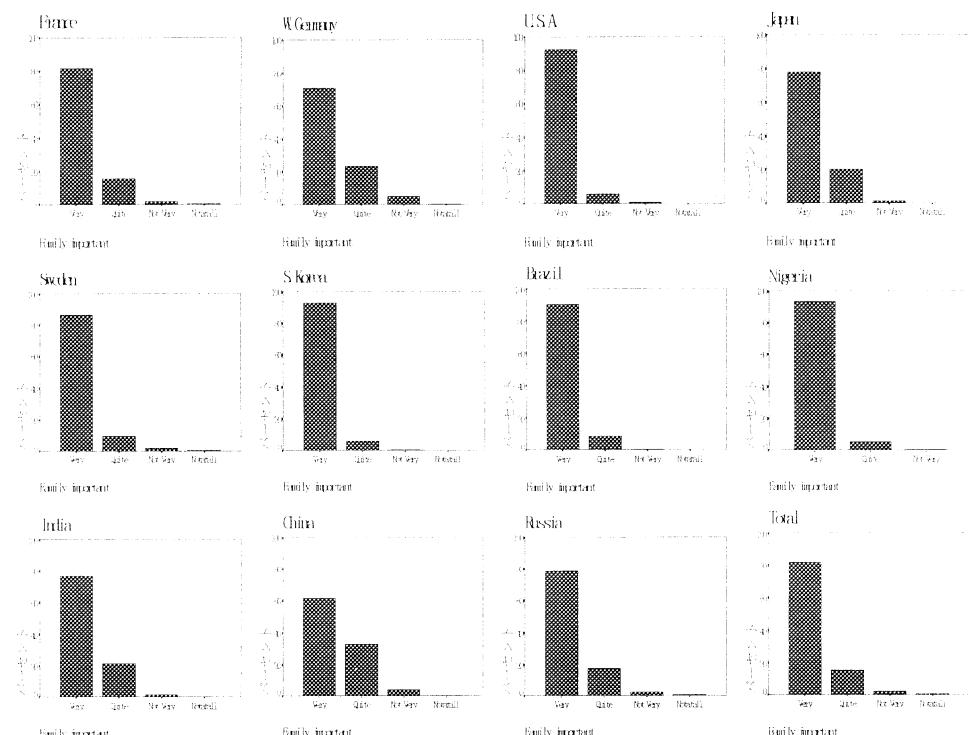


図3-2 v5 「重要度：家族」

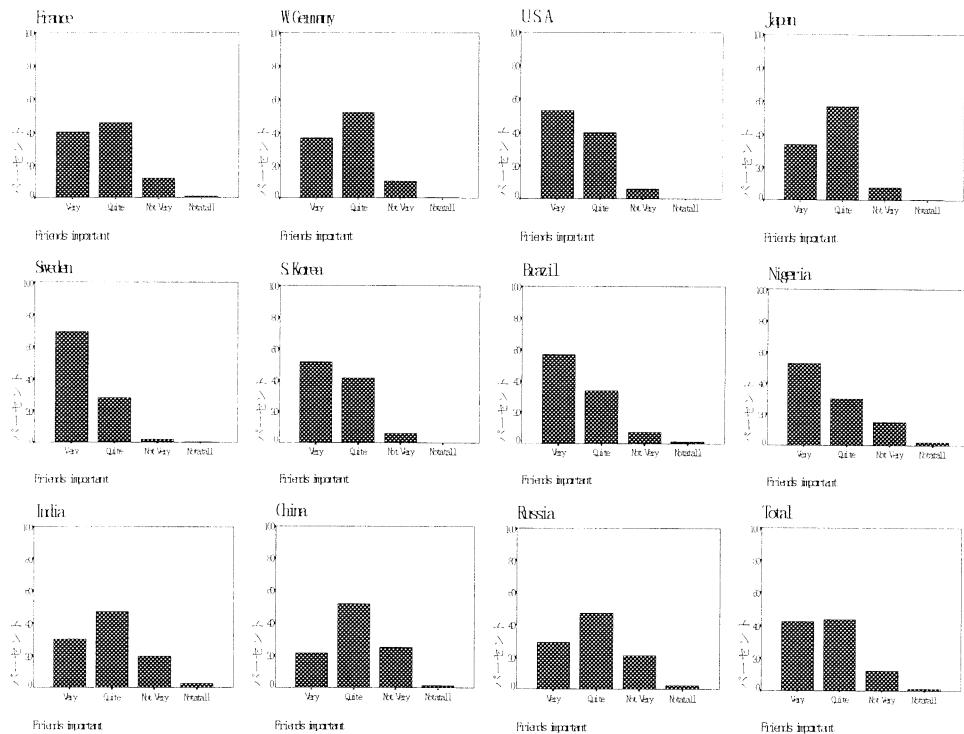


図3-3 v6 「重要度：友人」

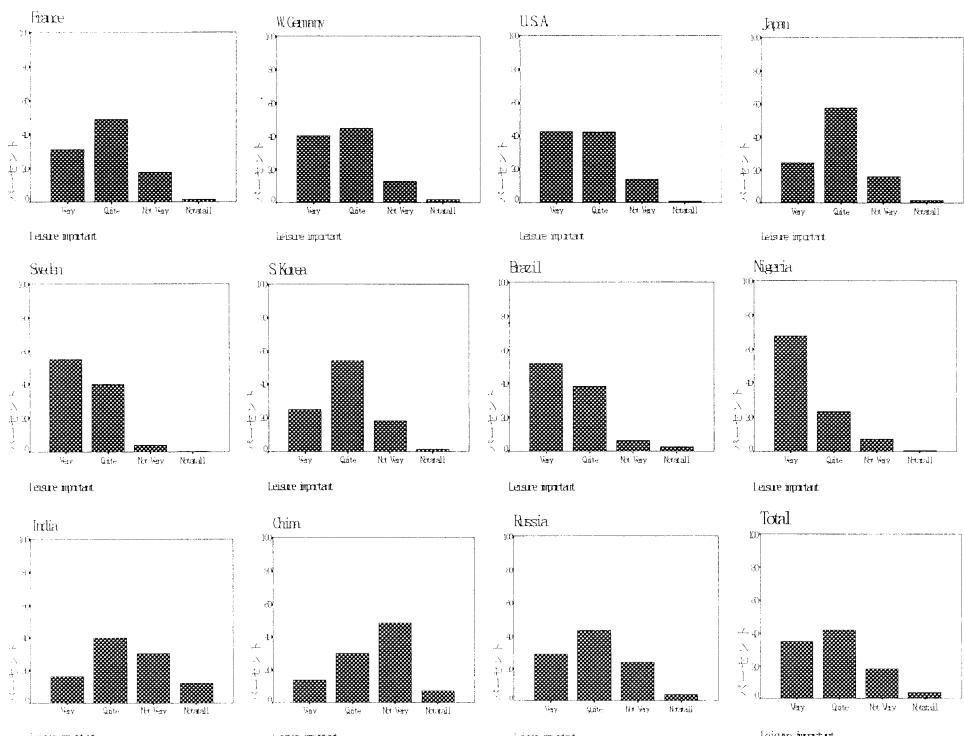


図3-4 v7 「重要度：余暇」

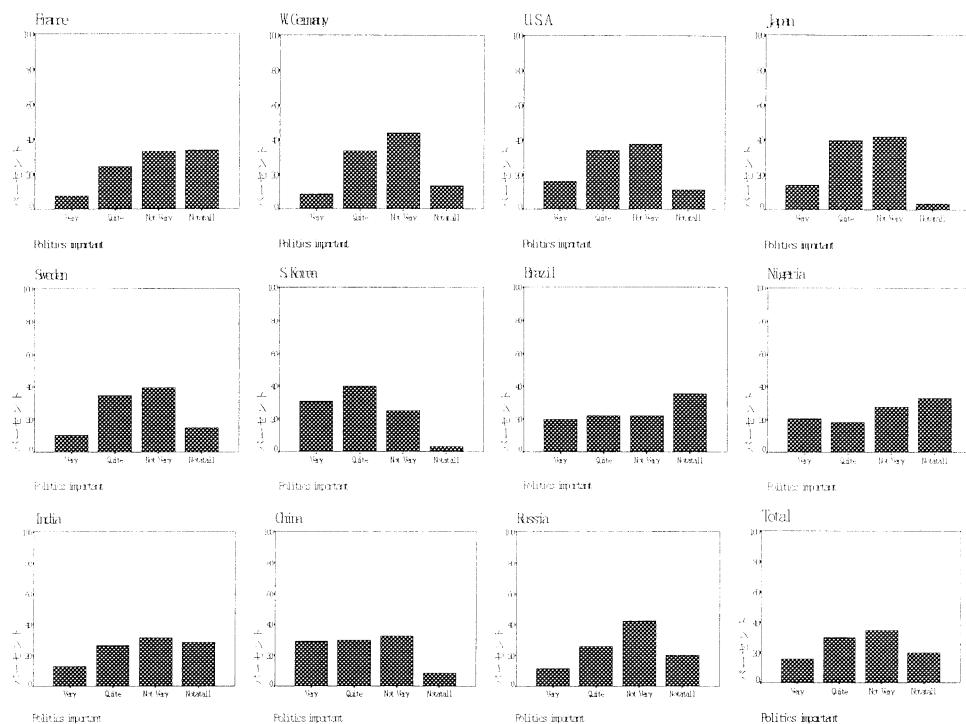


図 3-5 v8 「重要度：政治」

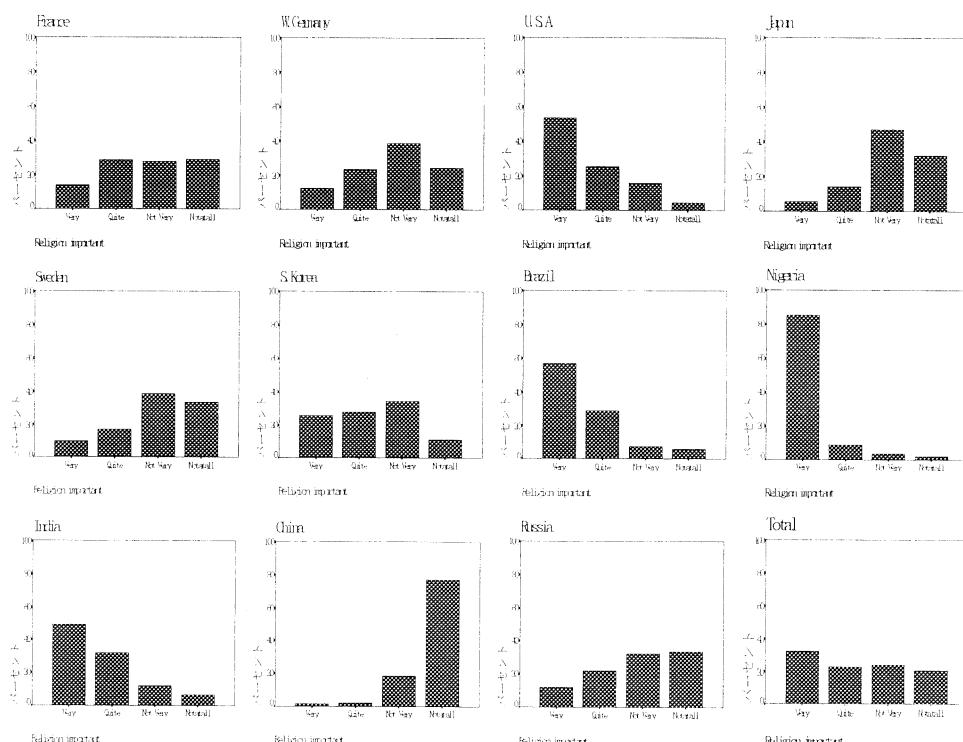


図 3-6 v9 「重要度：宗教」

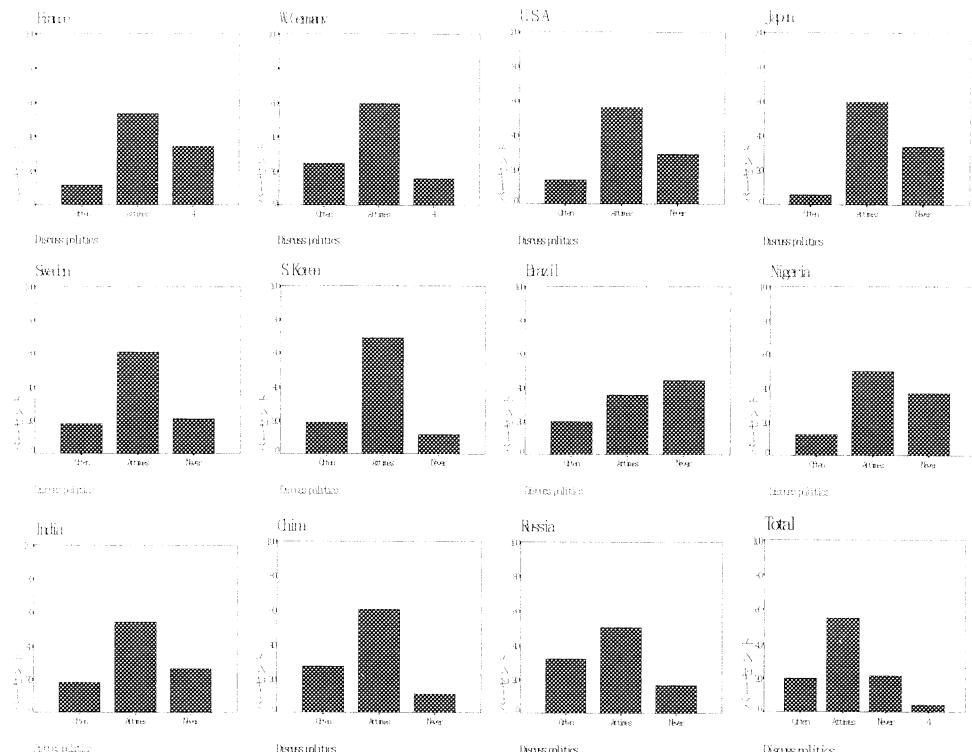


図3-7 v10 「政治の会話」

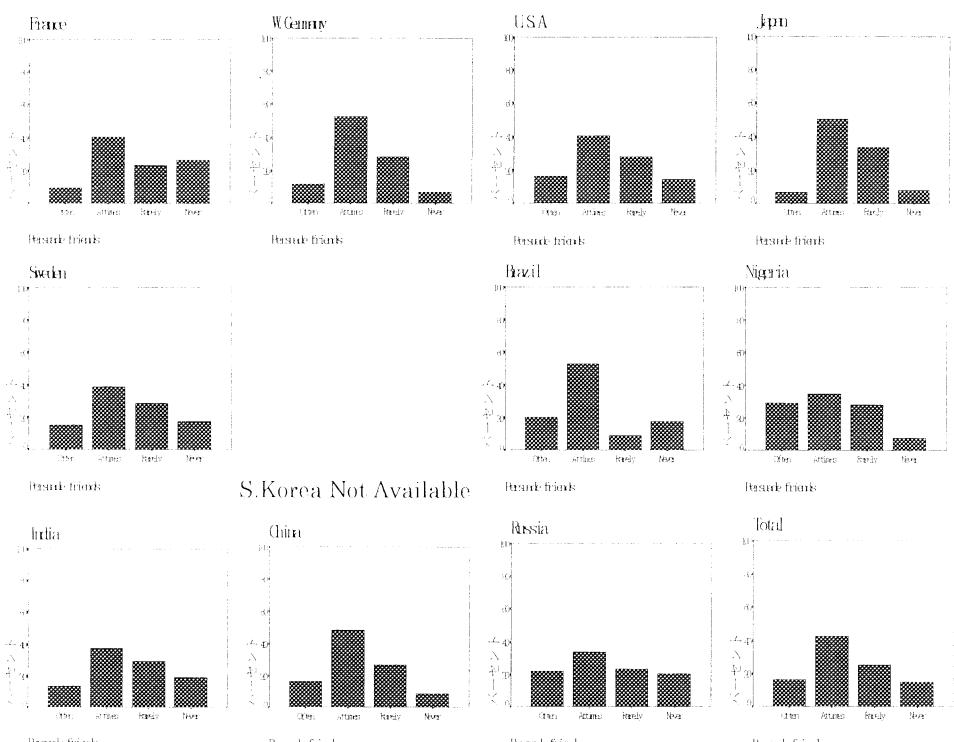


図3-8 v11 「自己意見の説得」

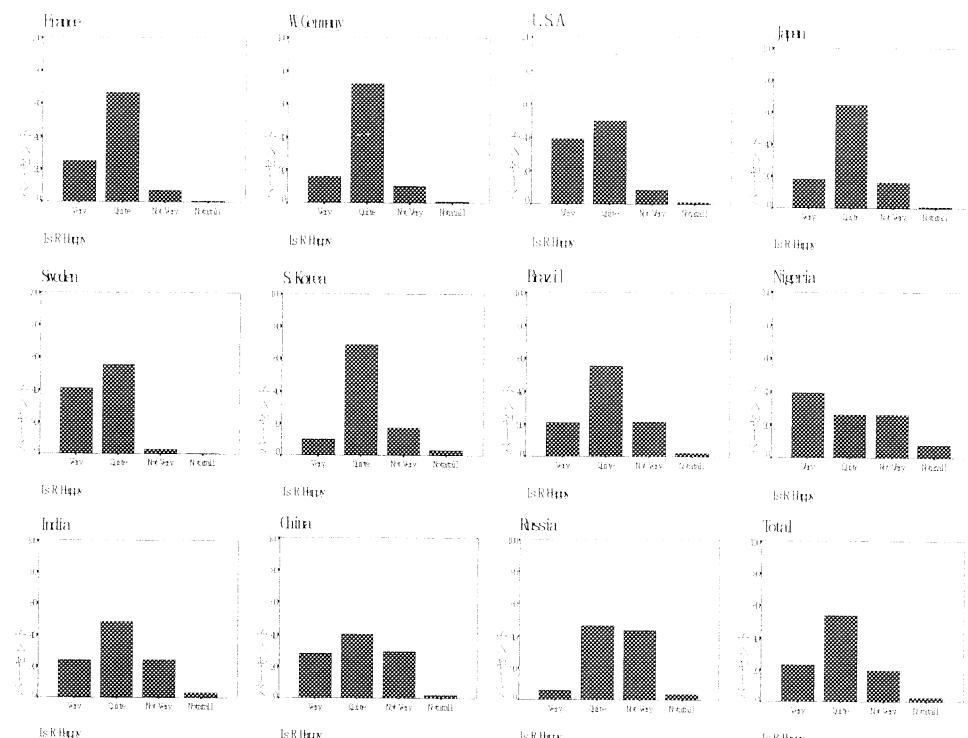


図 3-9 v18 「幸福感」

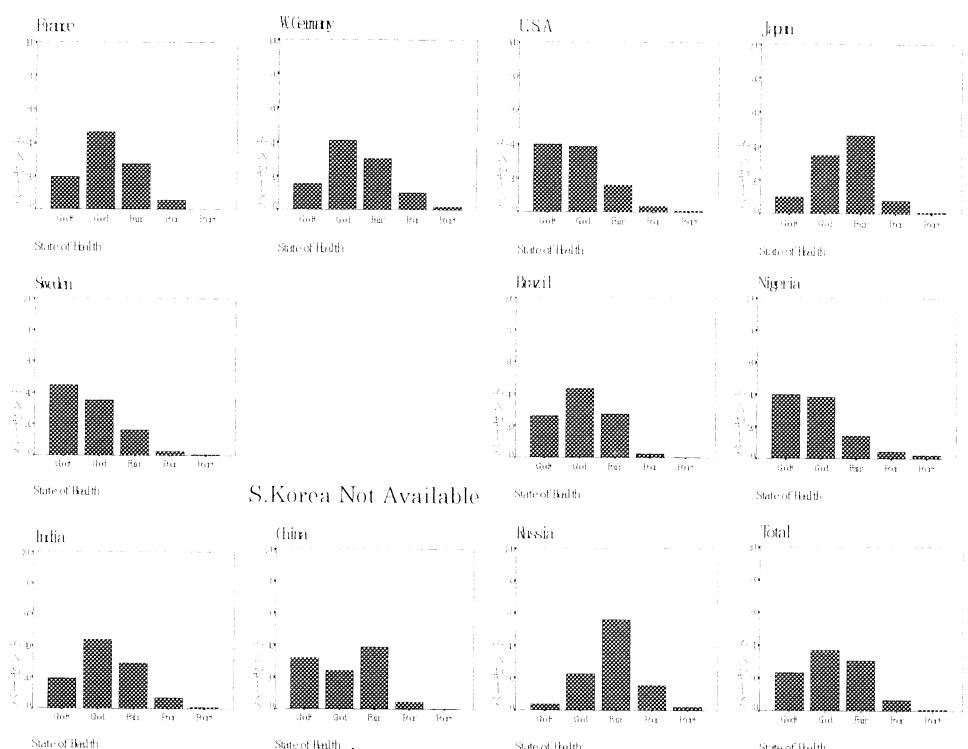


図 3-10 v83 「健康状態」

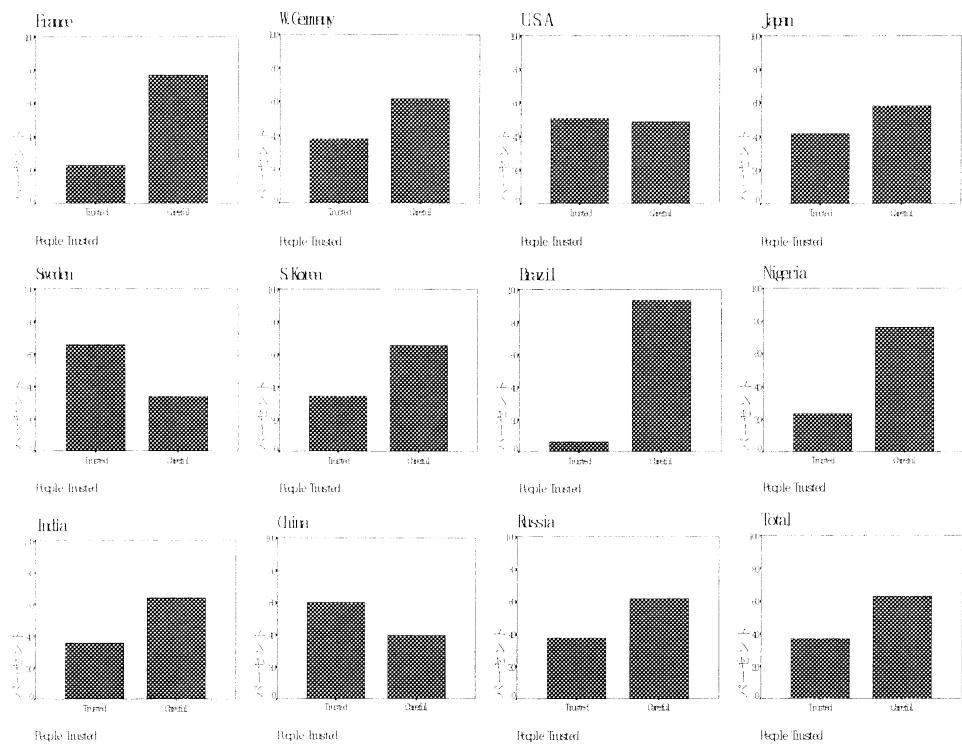


図3-11 v94 「人は信用・用心」

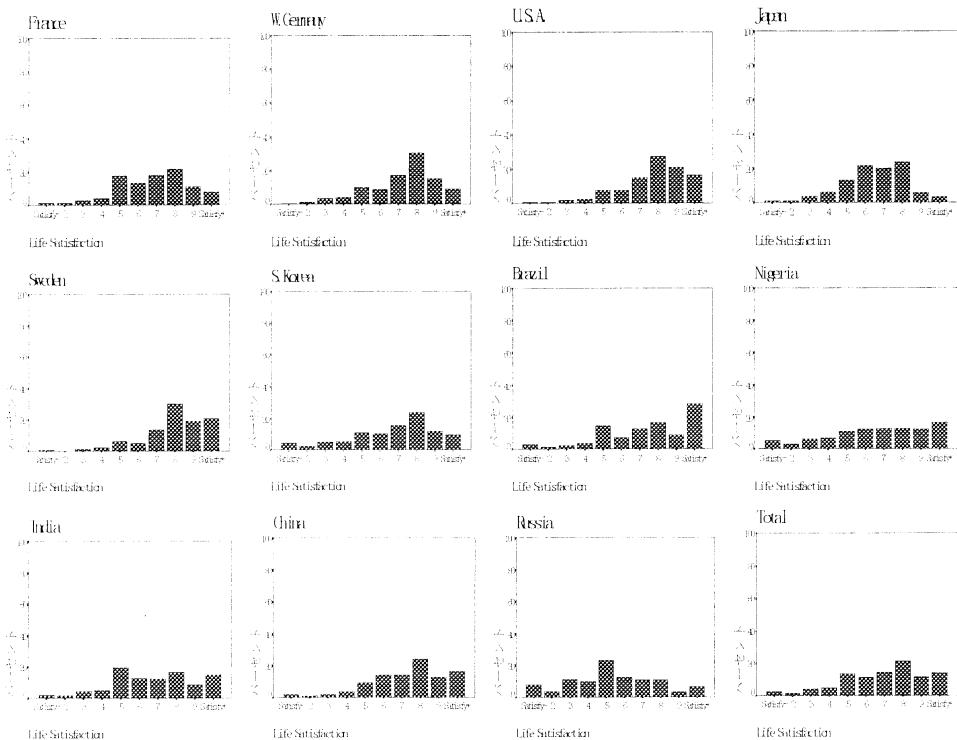


図3-12 v96 「生活満足度」

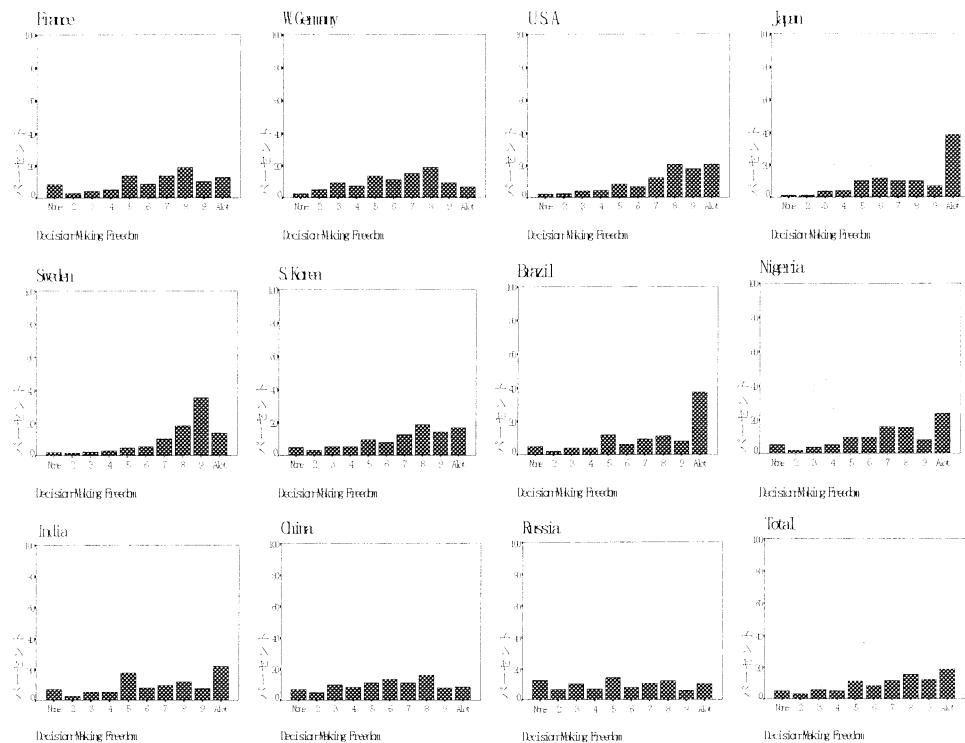


図 3-13 v117 「仕事における意思決定の自由」

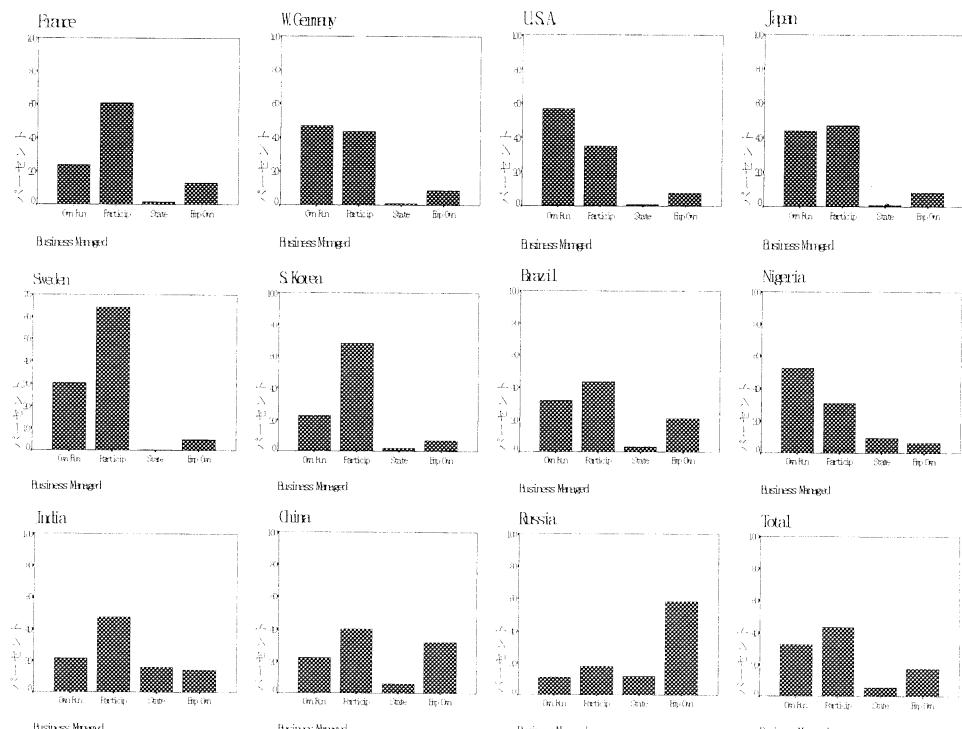


図 3-14 v126 「企業経営のあり方」

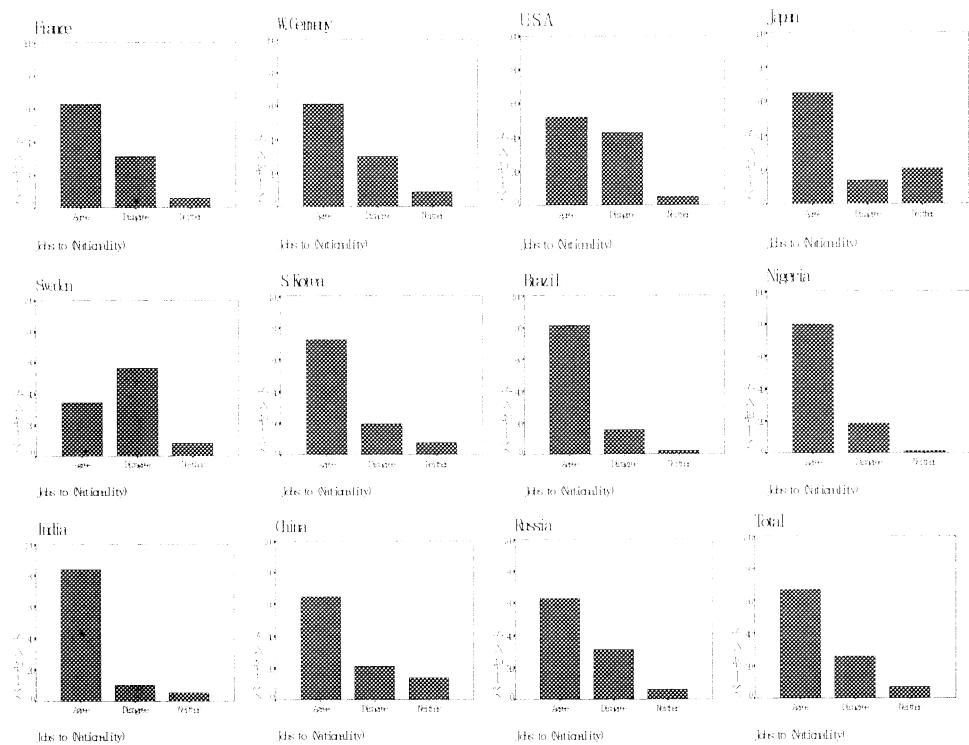


図3-15 v130 「自国民の雇用の優先」

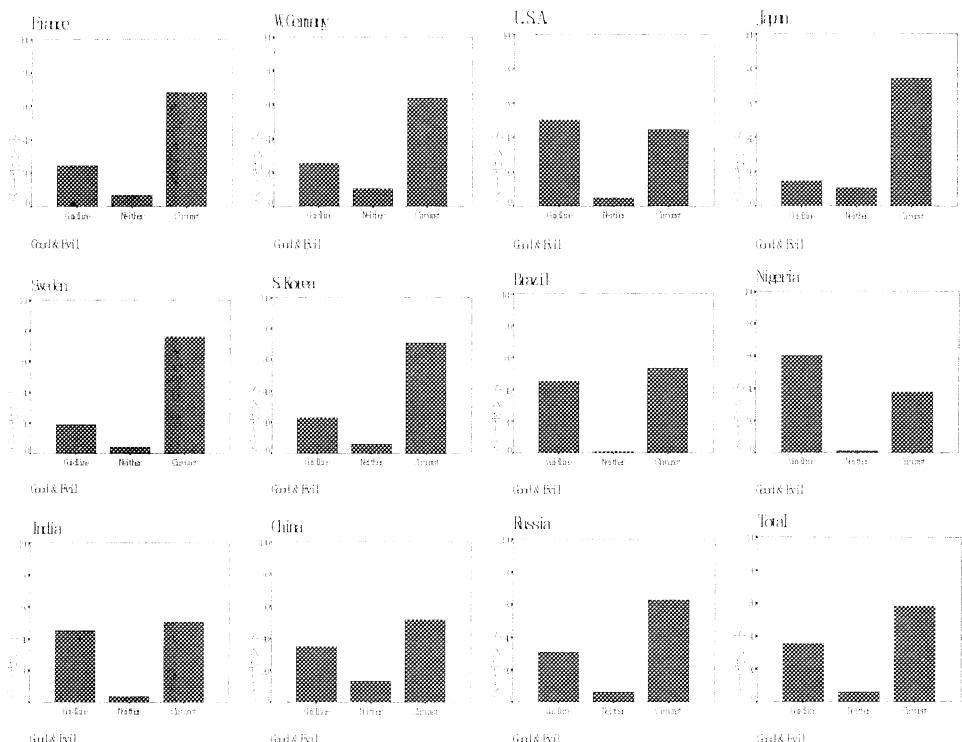


図3-16 v142 「善惡の価値基準」

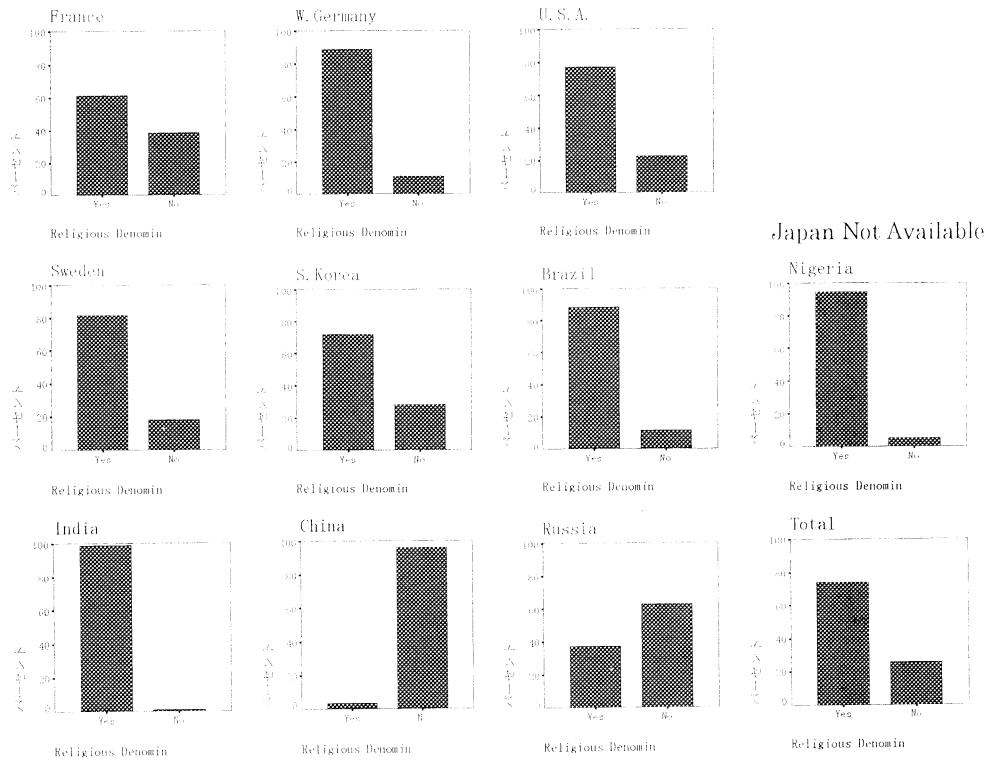


図3-17 v143 「宗教の有無」

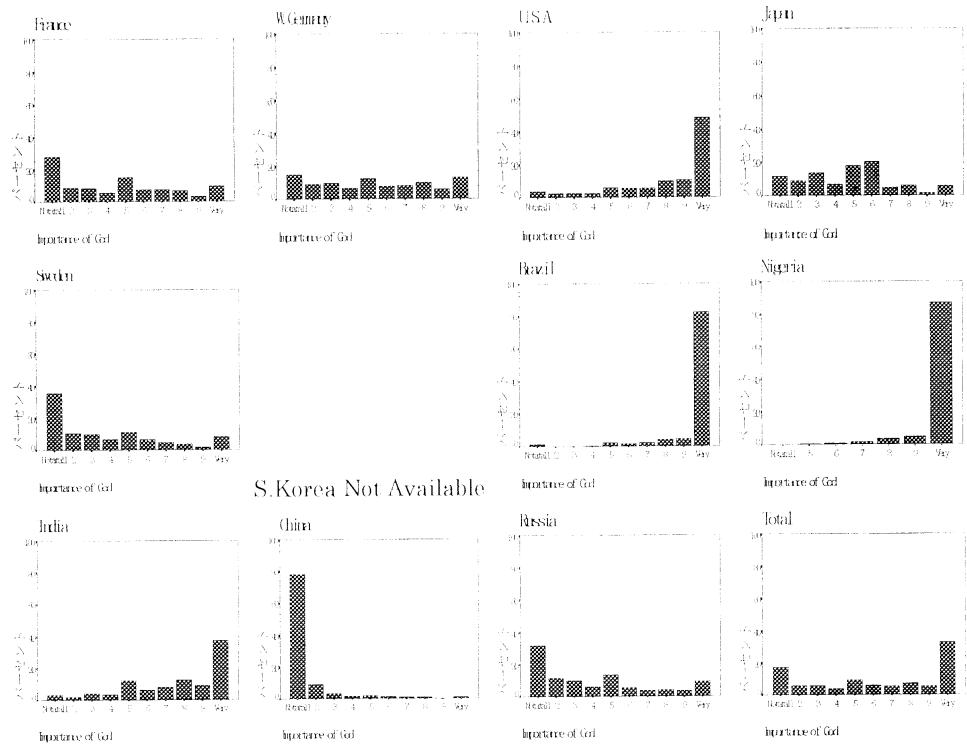


図3-18 v176 「神の重要度」

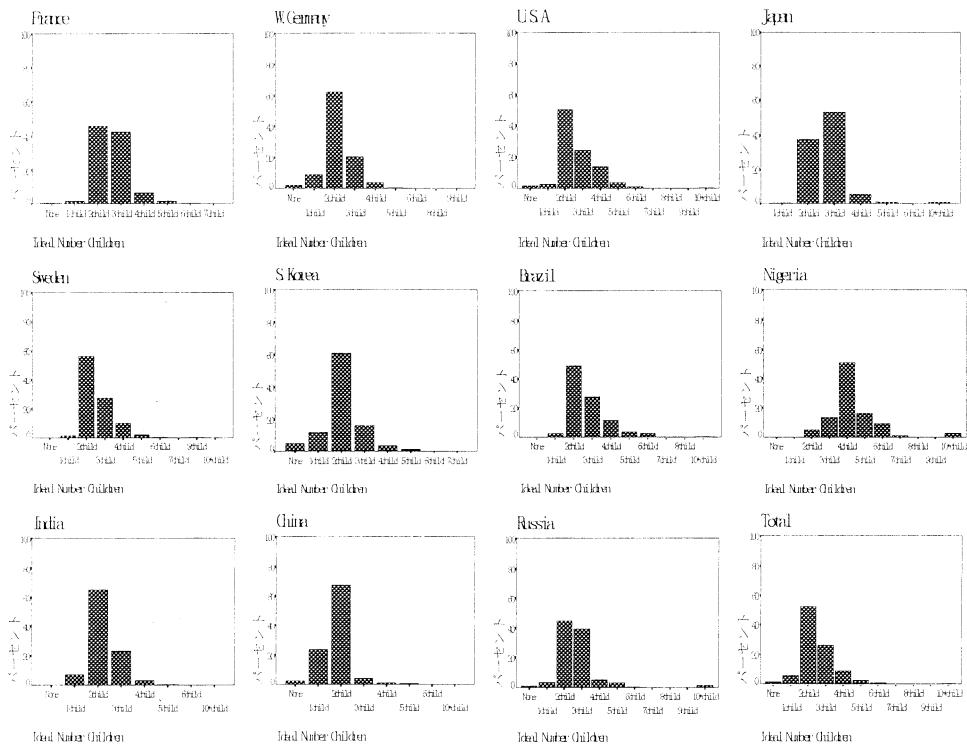


図3-19 v213 「理想の子どもの数」

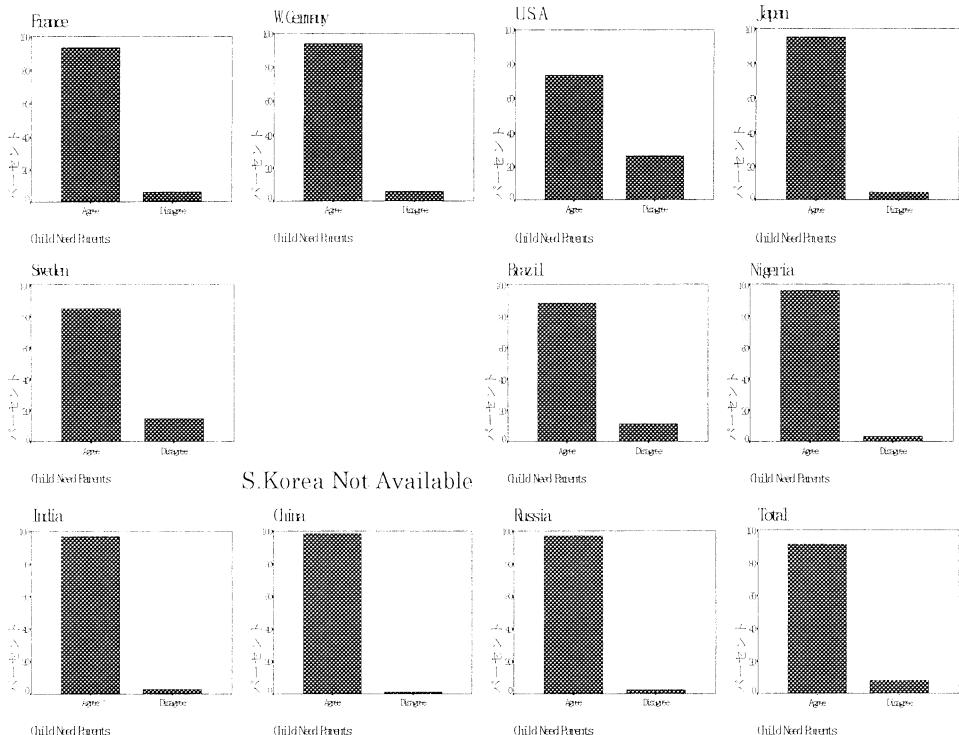


図3-20 v214 「子どもには両親が必要」

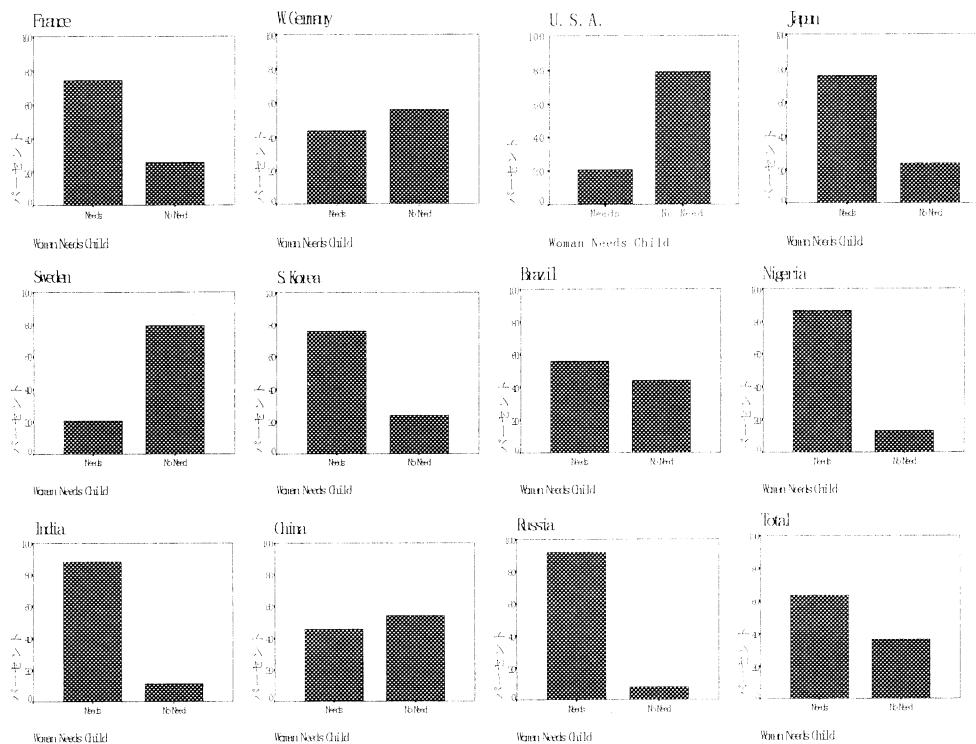


図 3-21 v215 「女性には子どもが必要」

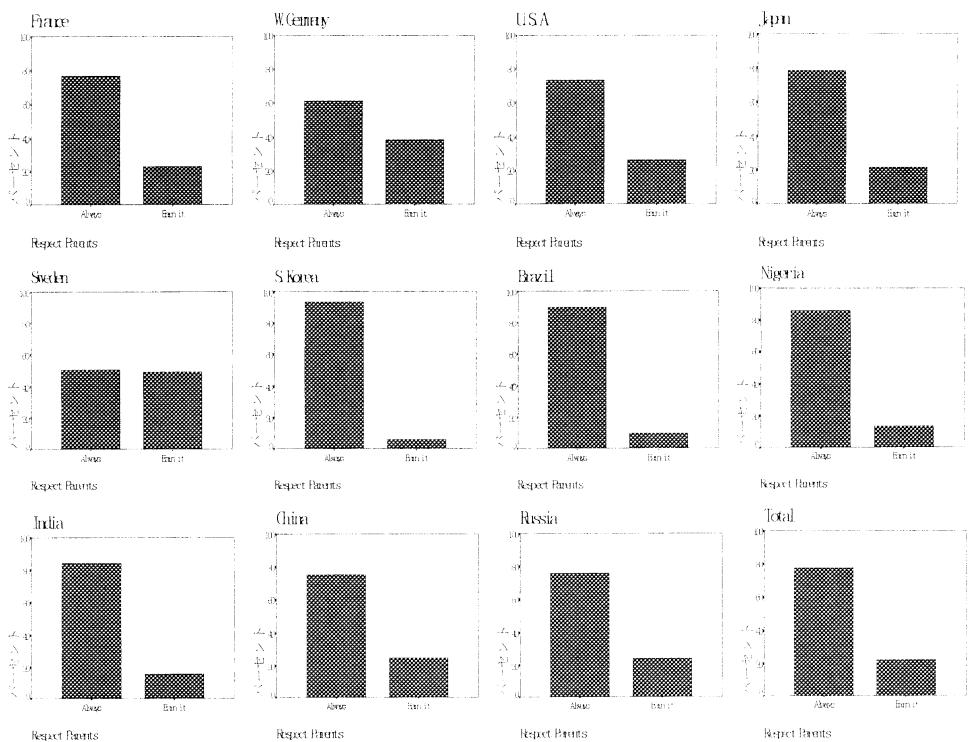


図 3-22 v224 「子どもは親を尊敬」

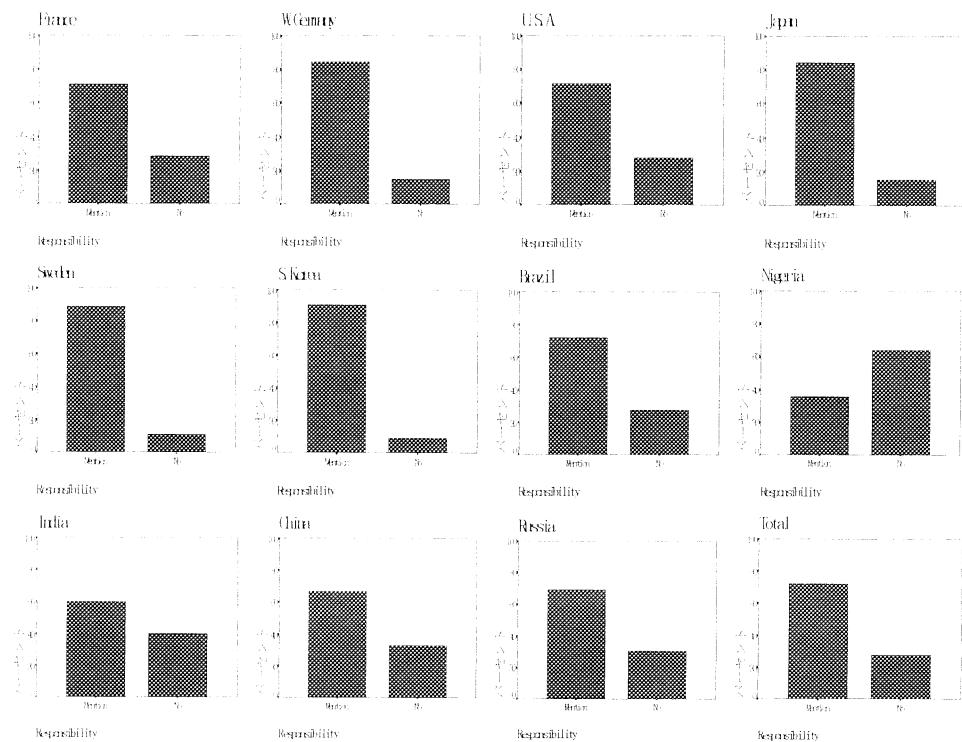


図3-23 v229 「責任感」

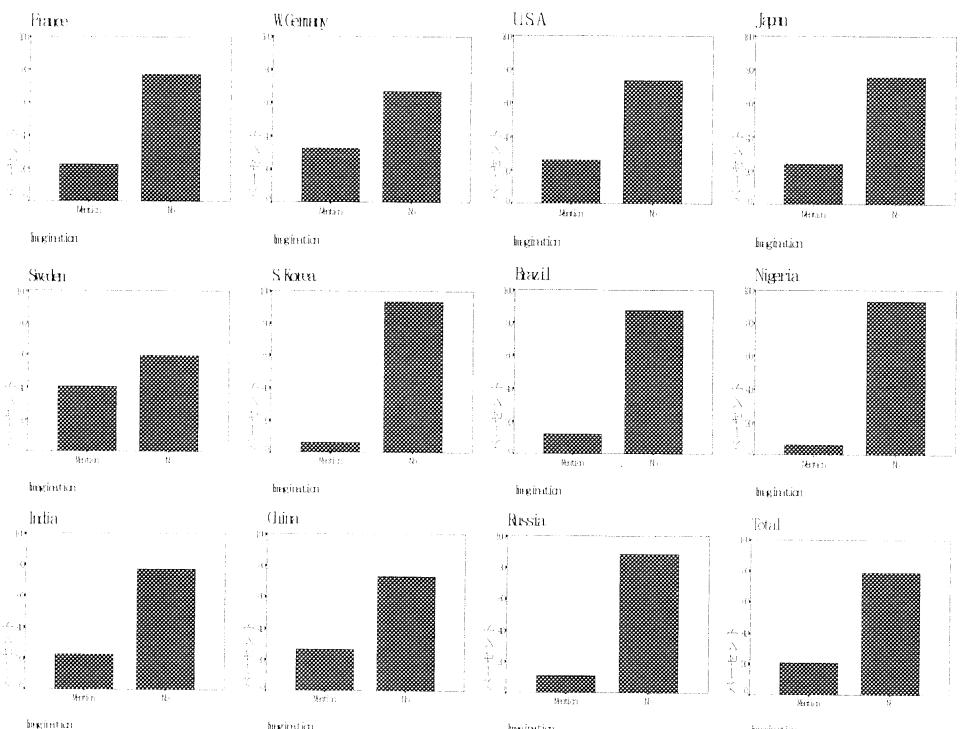


図3-24 v230 「想像力 / 創作力」

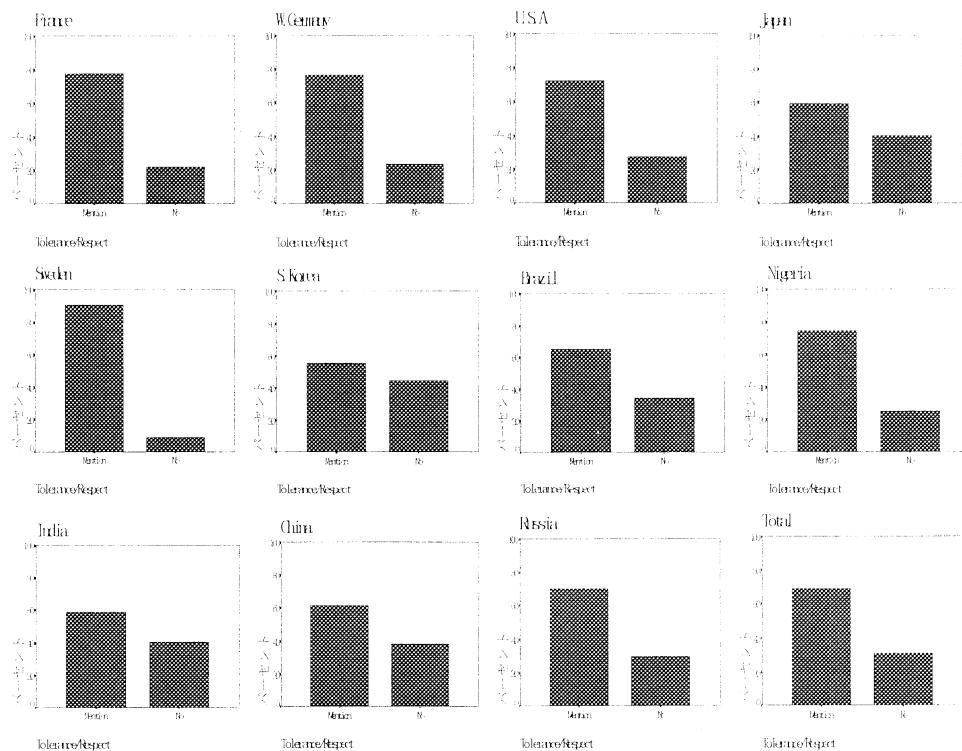


図 3-25 v231 「寛容性」

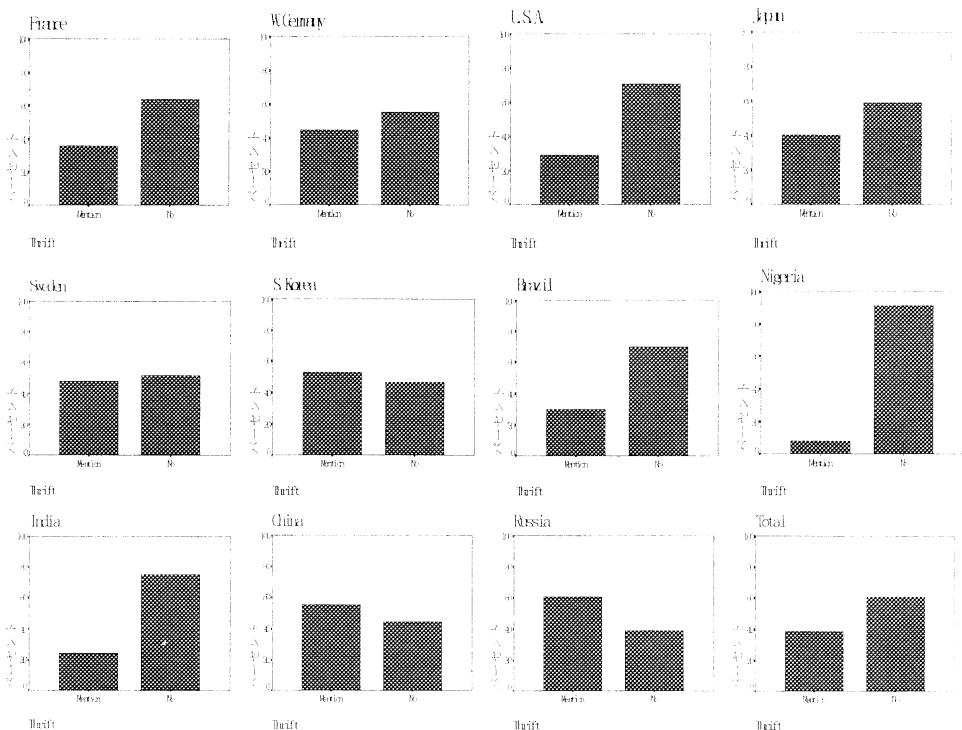


図 3-26 v232 「節約性」

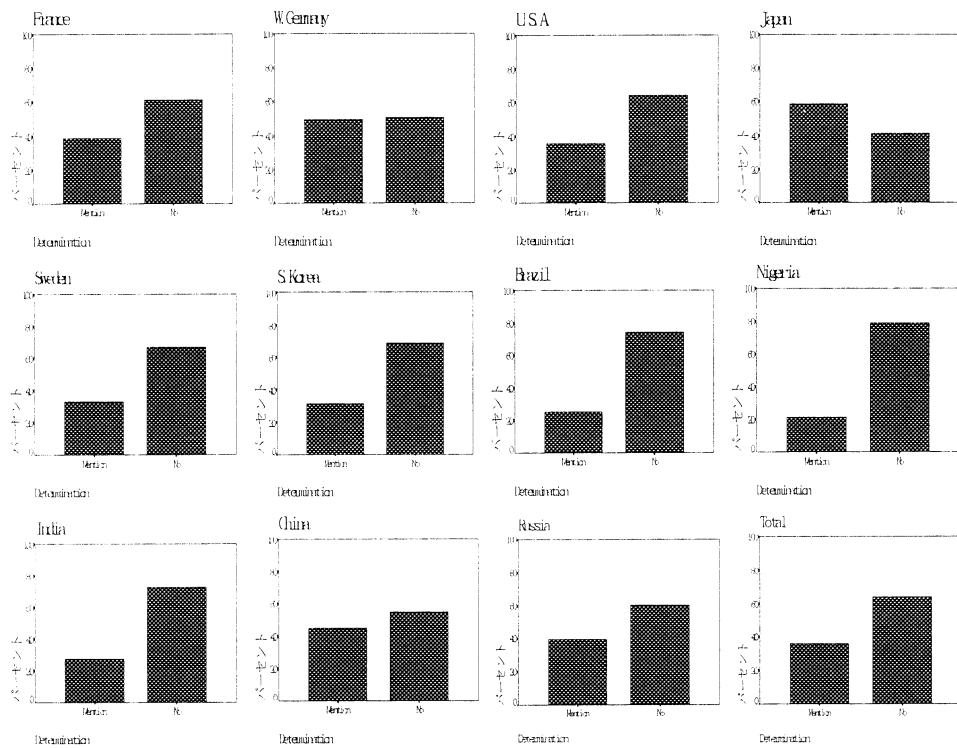


図 3-27 v233 「決断力 / 忍耐力」

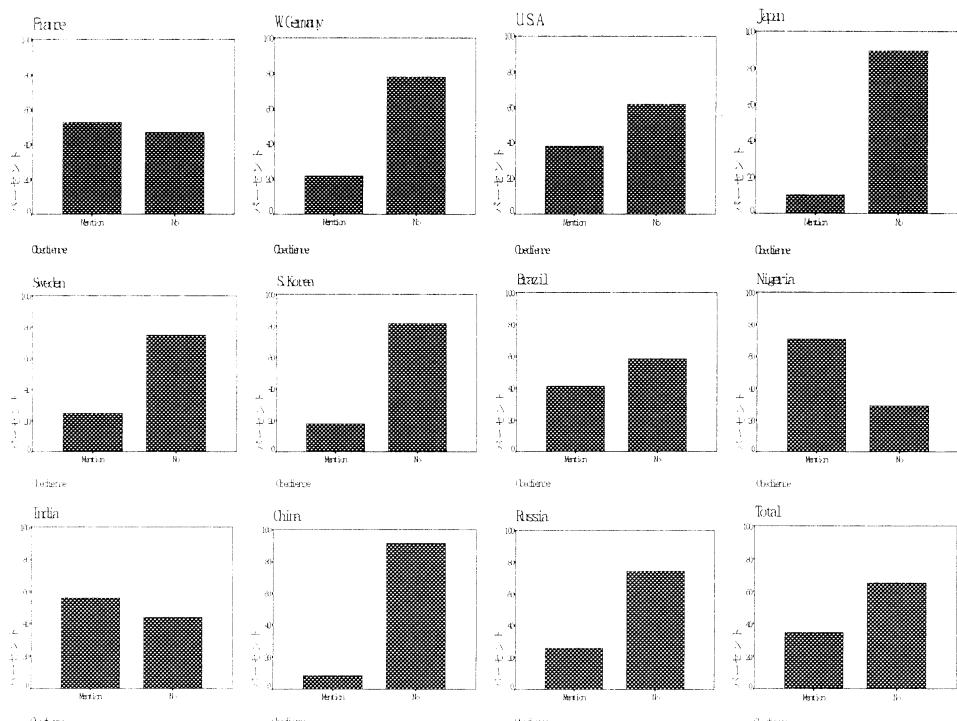


図 3-28 v236 「従順さ」

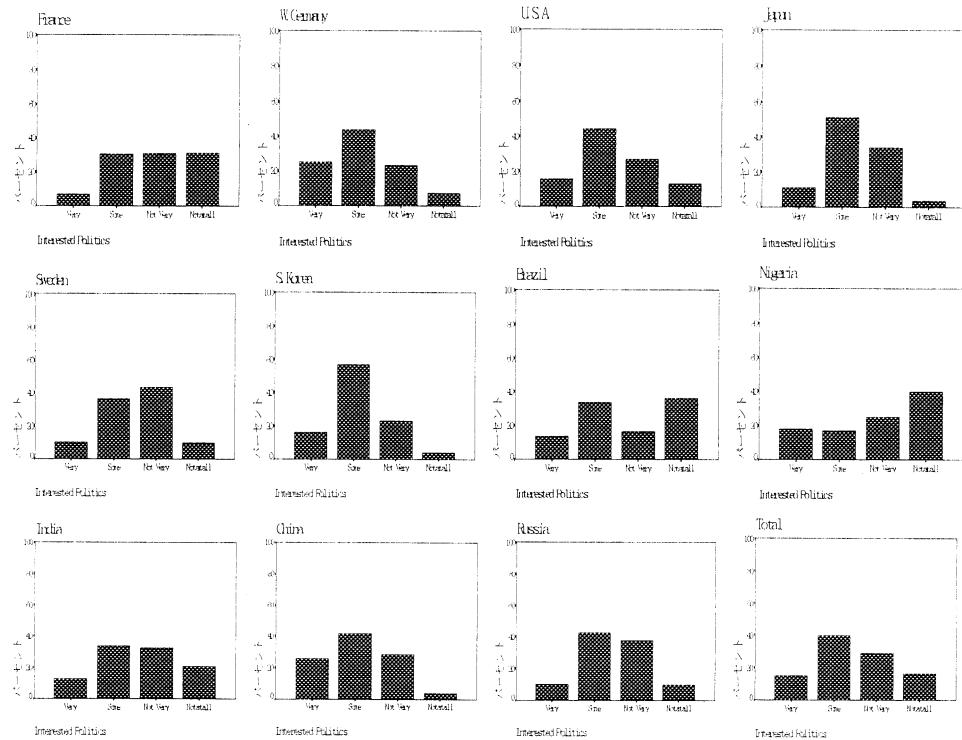


図 3-29 v241 「政治への関心度」

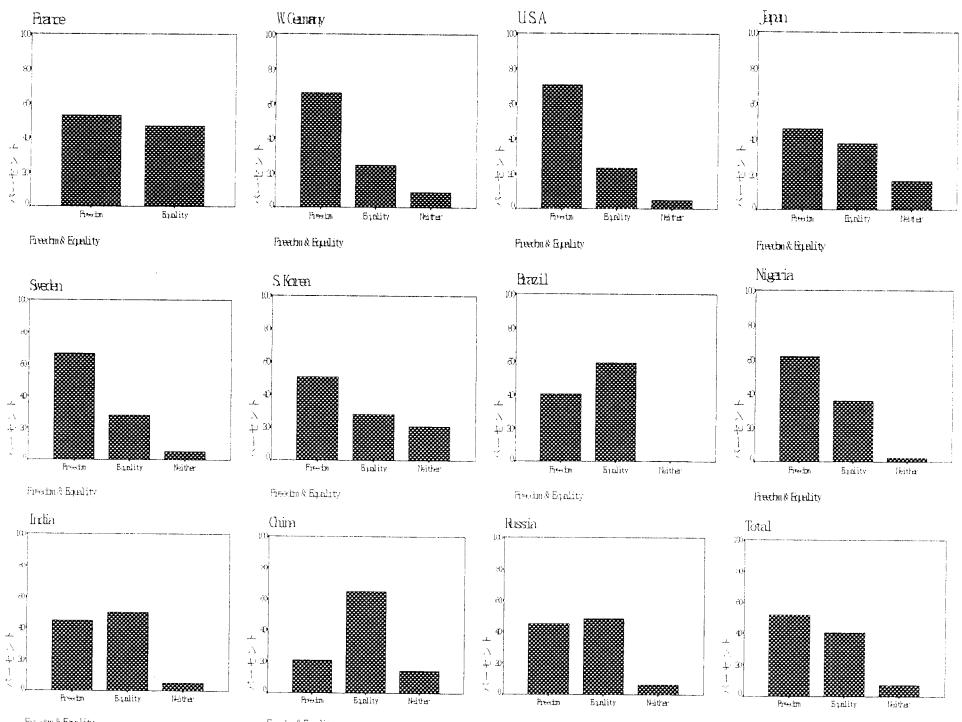


図 3-30 v247 「自由と平等」

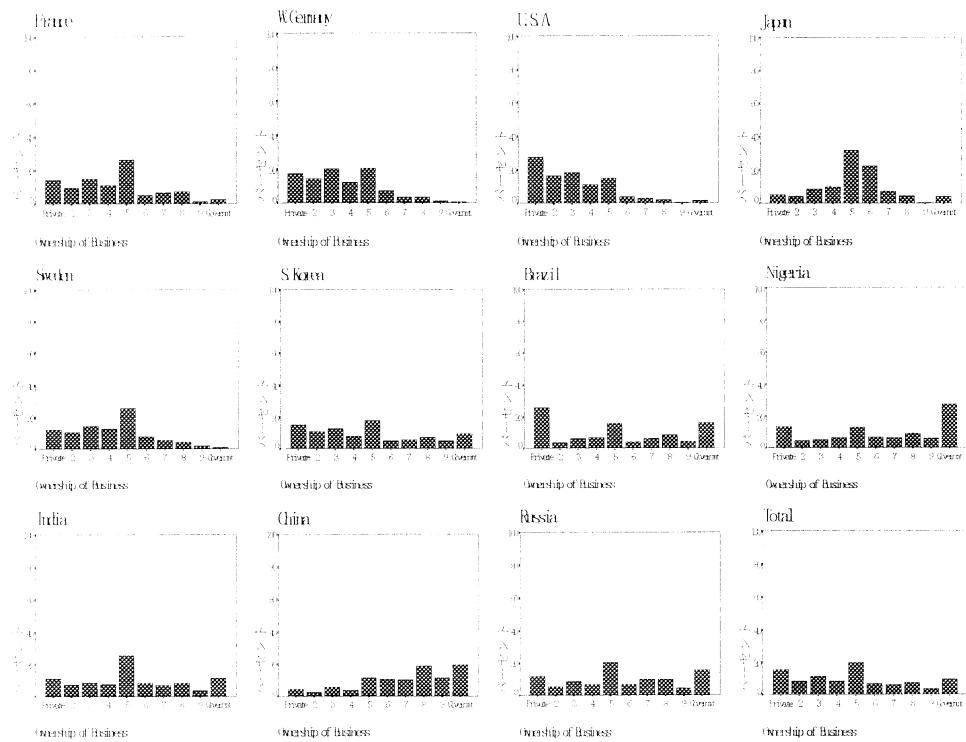


図3-31 v251 「企業の所有」

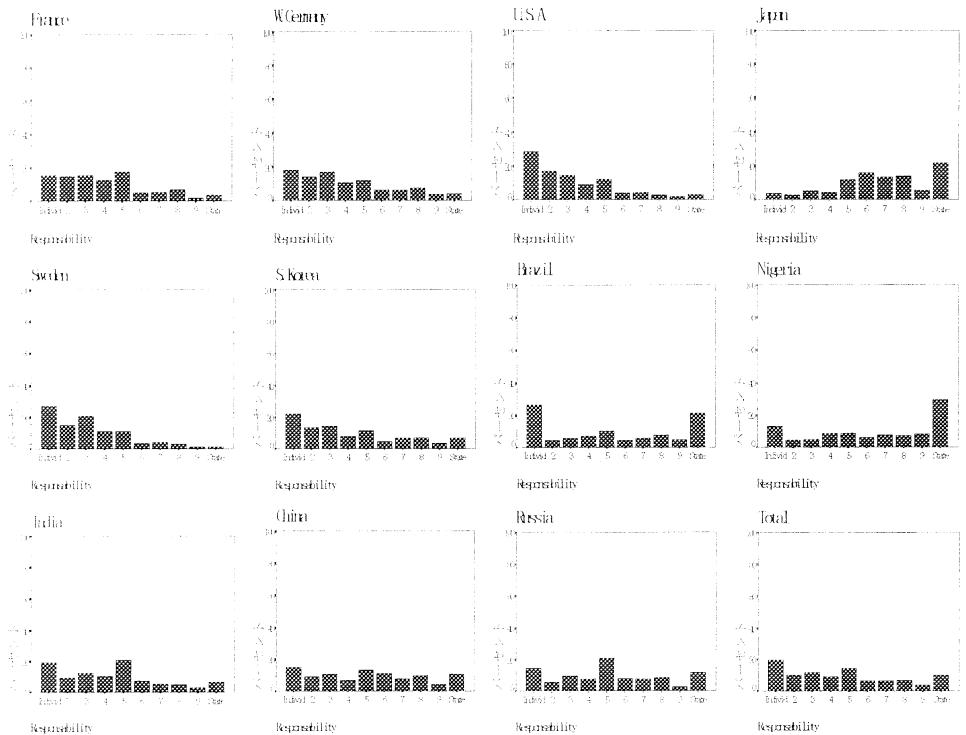


図3-32 v252 「責任」

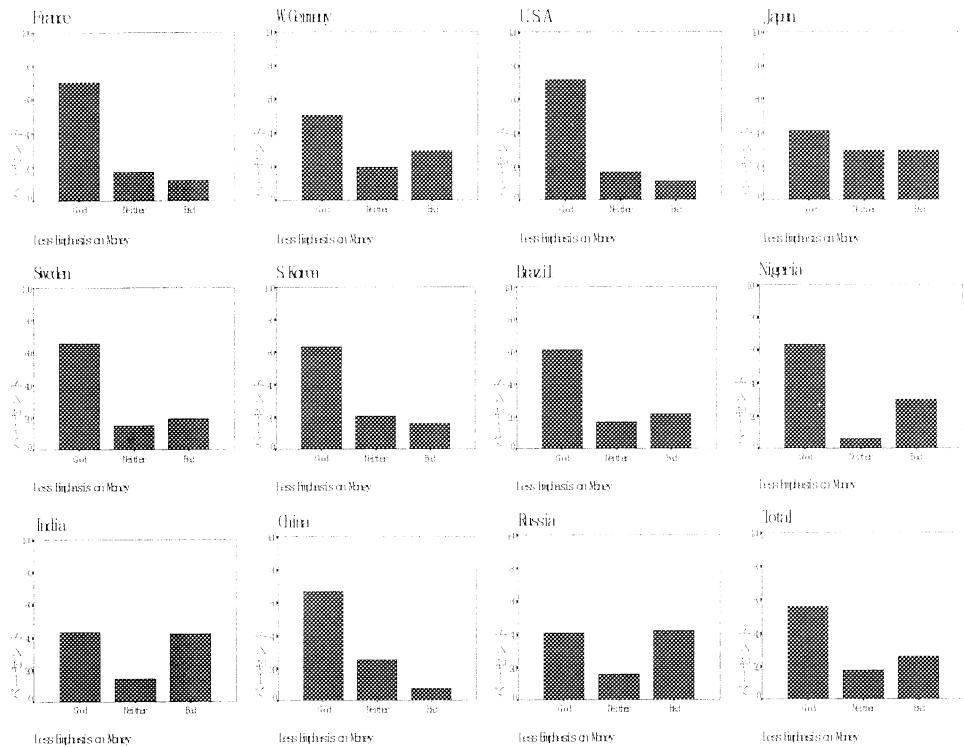


図 3-33 v264 「お金に執着しない」

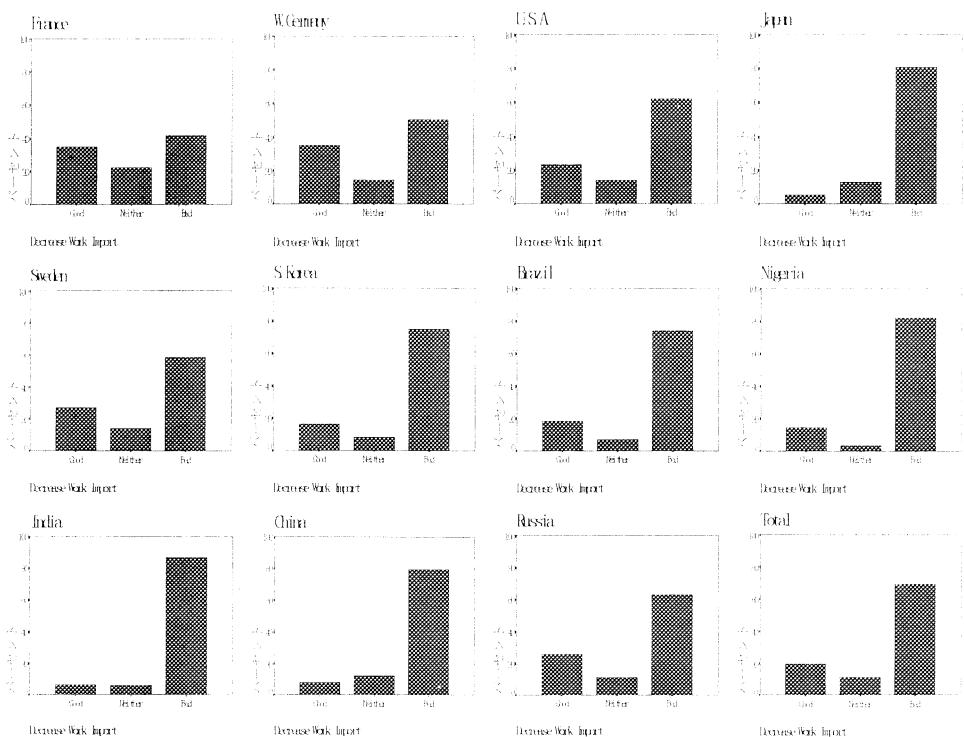


図 3-34 v265 「働くことがあまり大切でない」

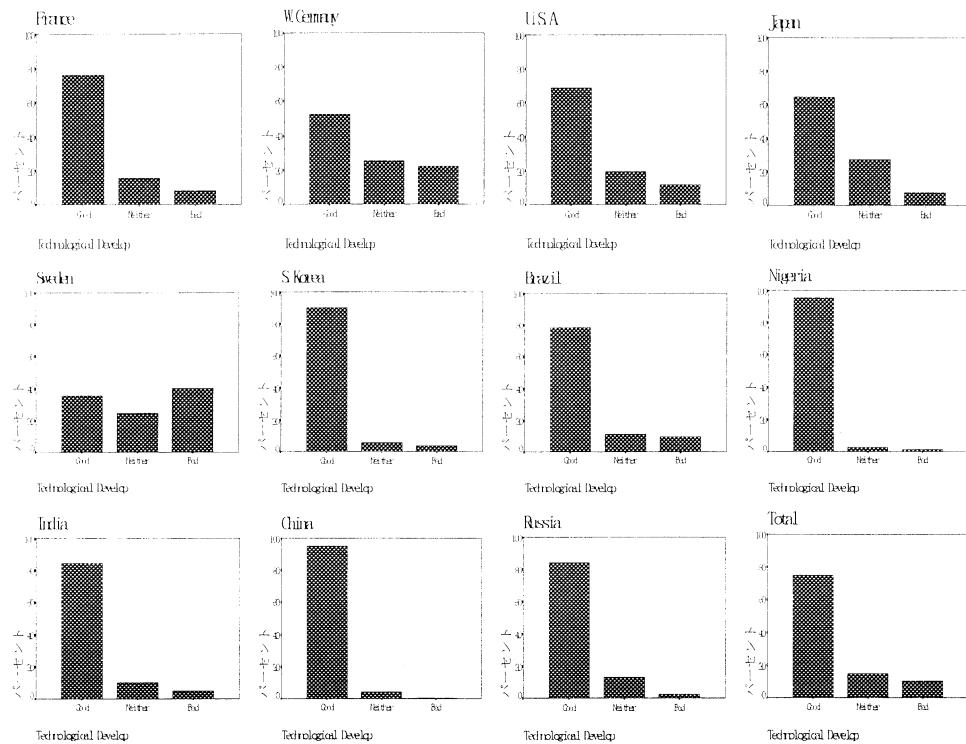


図3-35 v266 「技術開発の重視」

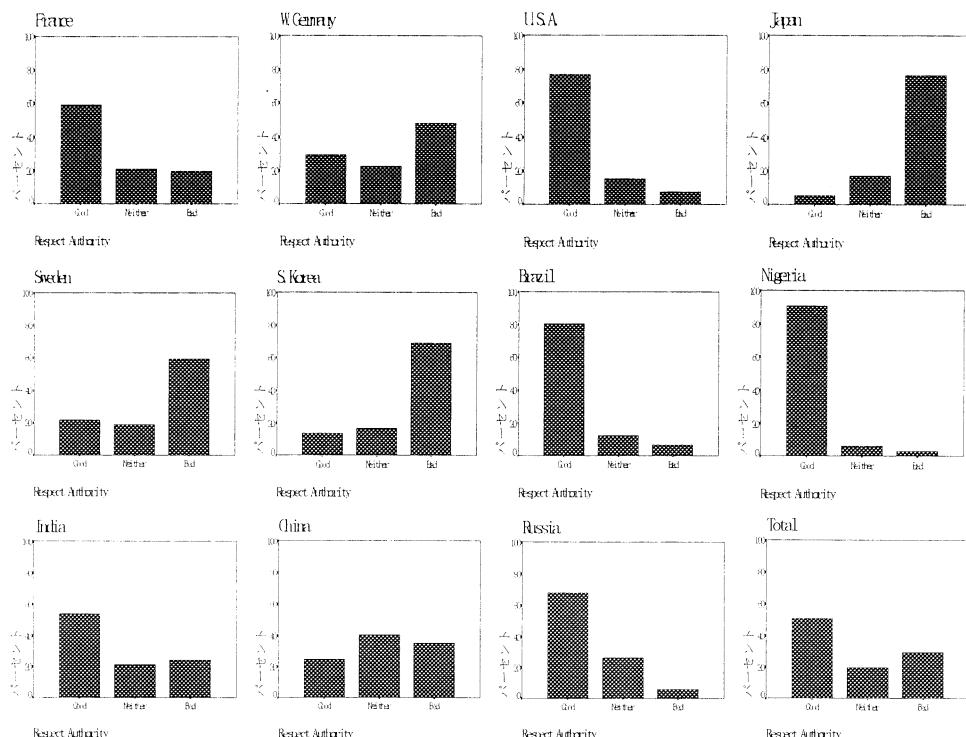


図3-36 v268 「権威の尊重」

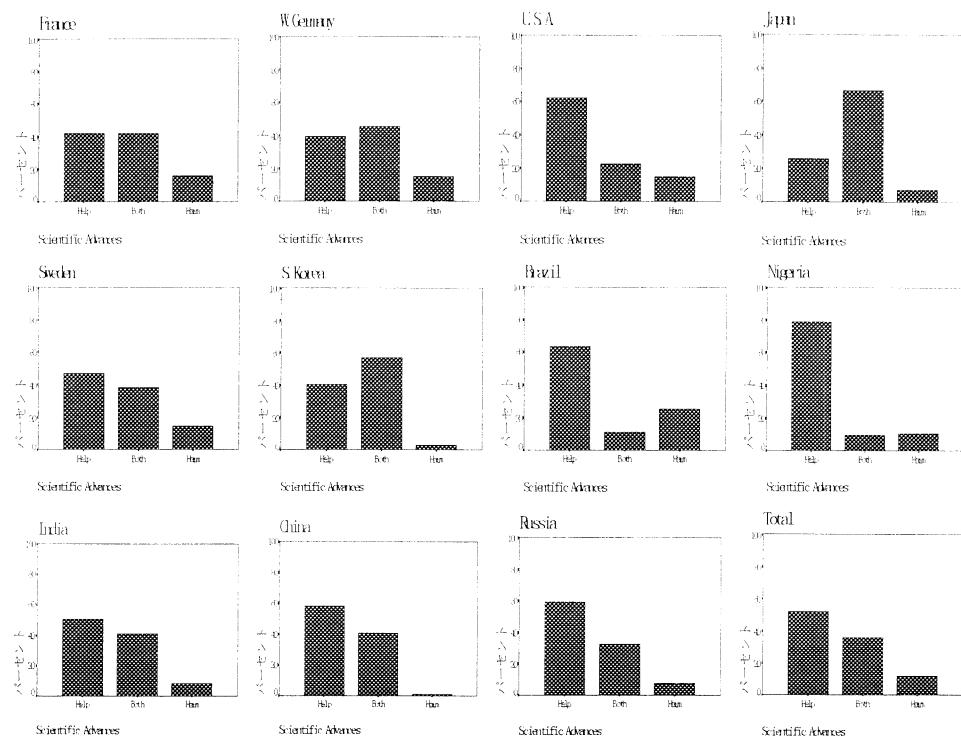


図 3-37 v271 「科学の進歩」

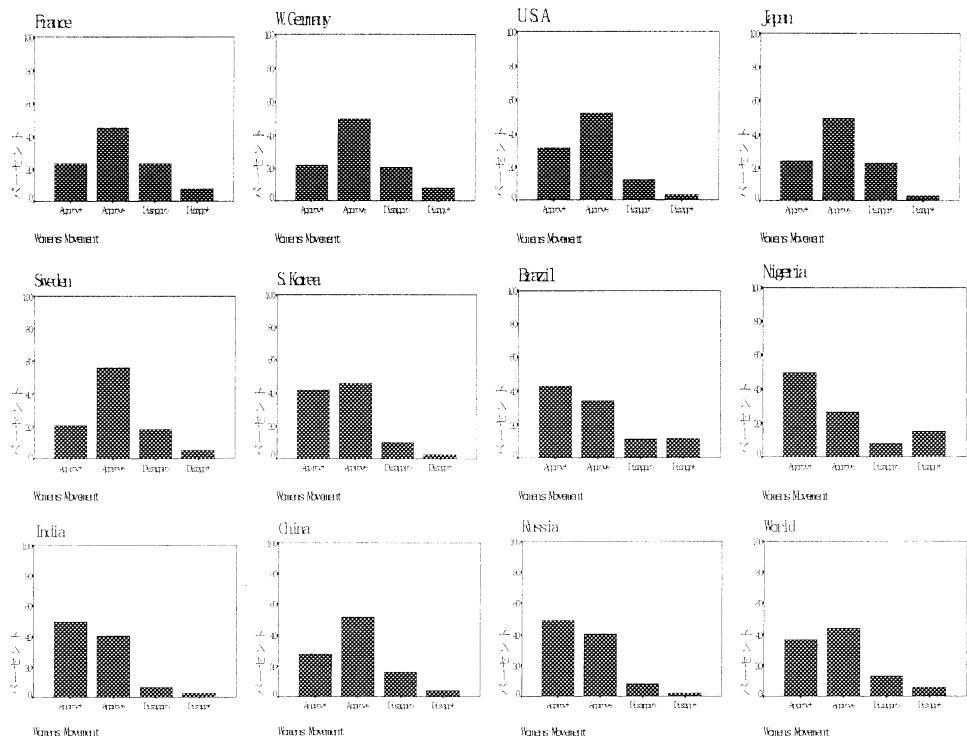


図 3-38 v294 「女性運動」

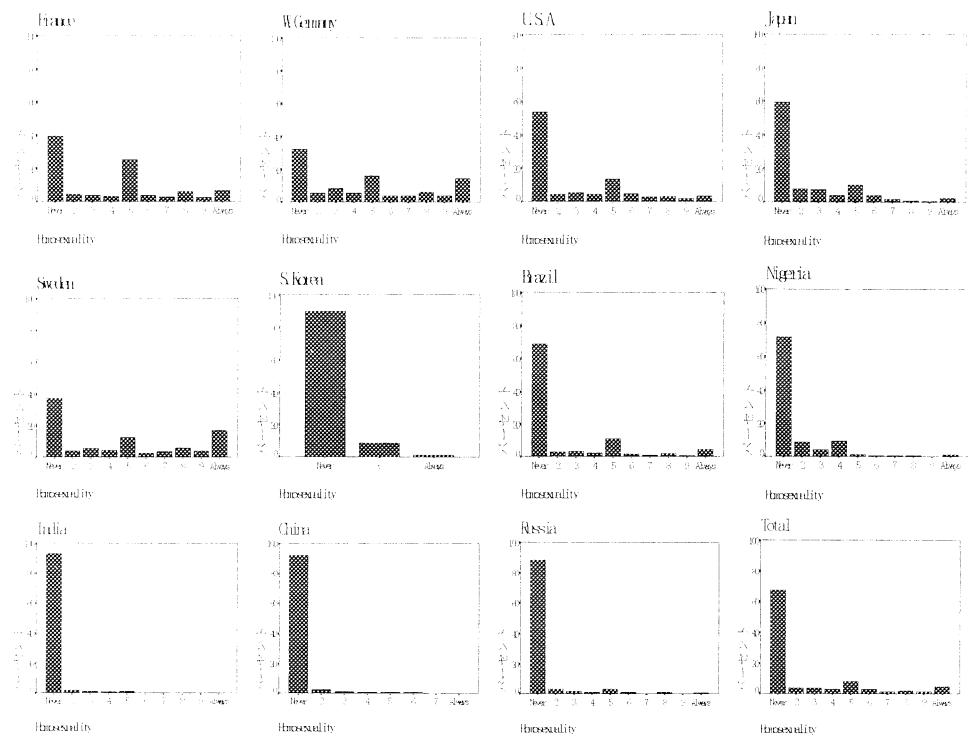


図3-39 v307 「同性愛」

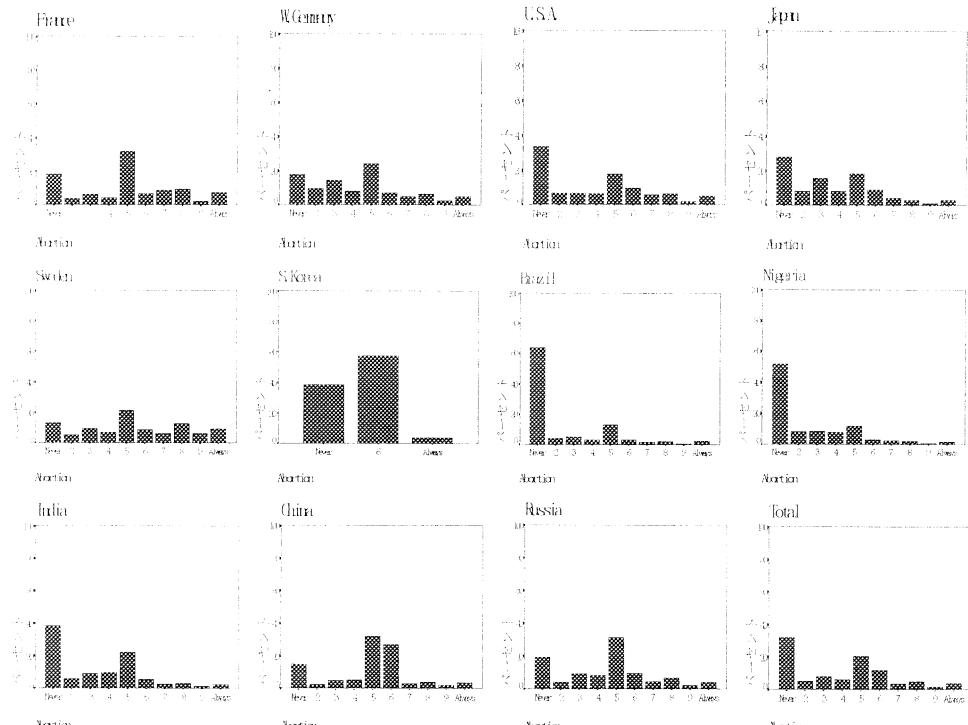


図3-40 v309 「妊娠中絶」

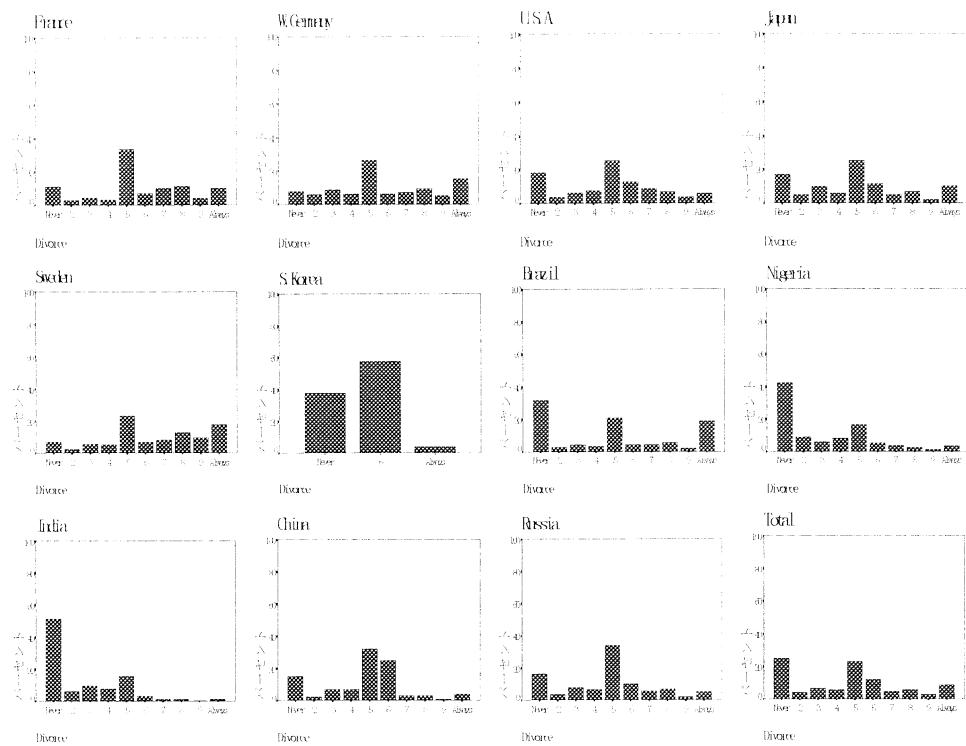


図 3-41 v310 「離婚」

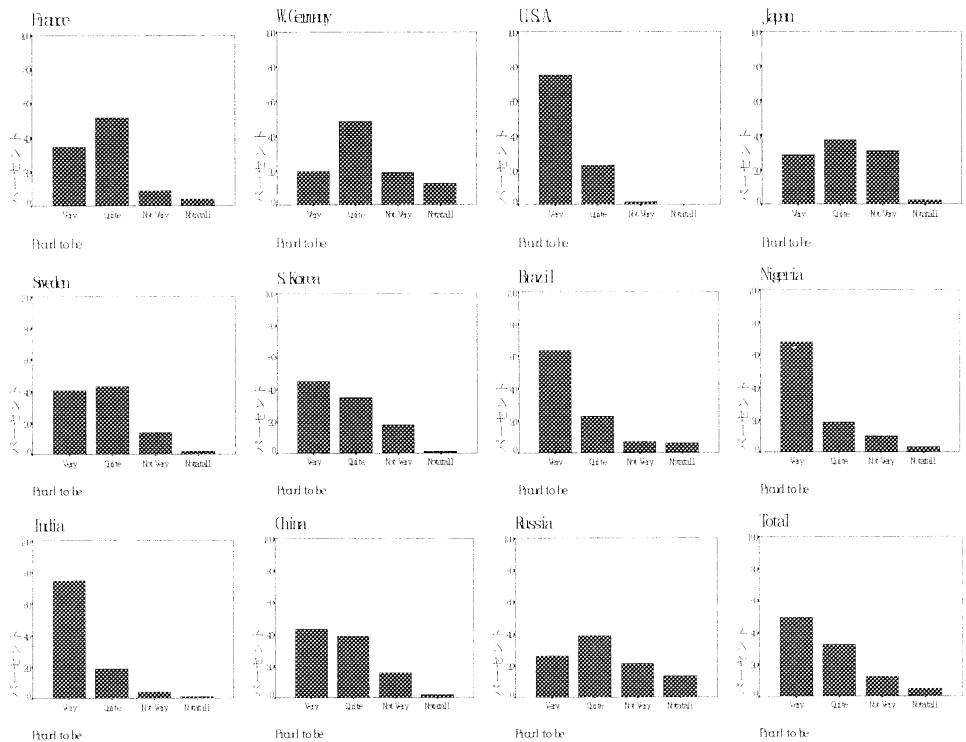


図 3-42 v322 「自国民としての誇り」

感じる」でバイモードになっている。

3 むすびにかえて

以上のように42変数（項目）は各国によって様々な分布を示している。ところが、平均値は極端な分布を相殺してしまう。したがって、分布を考慮するという段階を踏まえずに、平均値を国際比較のデータ解析に用いるのは問題である。国によっては異なるコーディングがなされている項目もあるので、平均値を用いる際にはその点も考慮しなければならない。また、国によって質問が設定されていない項目、設定されているがデータ化されていない項目などを分析に含めるのも、当該国がその分析においては「欠損値扱い」とされてしまうという点で問題である。よって、今後は以上の様々な各国の分布を踏まえたうえで、国際比較を行うための変数を選択していく作業を行わなければならないであろう。

参考文献

- Paul G. Hoel (1976) *Elementary Statistics, 4th Edition*,
John Wiley & Sons, Inc. [P. G. ホーエル著 浅井
晃・村上正康（共訳）『初等統計学 原書第4版』
培風館 pp. 191-192 1963, 1970年]
真鍋一史・栗田真樹・劉志明・加藤敬子・李鍾煥
(1996) 「R. イングルハート (R. Inglehart) の『世
界価値観調査 (World Values Survey) データ』の
二次分析のための準備作業」 関西学院大学社会学
部紀要75号 pp. 67-82
(栗田真樹)

III 分析対象項目索引について

世界価値観調査データにもとづくイングルハートの命題は全体的な理論枠組の中で引用されるとなく、部分的に引用される場合が多く、また、命題そのものがどう調査され、どう検証されたかが明示されておらず、追体験がしにくくなっている。そこで本稿は『MODERNIZATION AND POSTMODERNIZATION-Cultural, Economic and Political Change in 43 Societies』(1997、Princeton UP/A の原本になるもの)において、どのような命題がどう測定されたのかを明らかにすることを目的とする。

Item List は分析に使用されている項目の原調査の質問項目との関係や属性を明確にすることにより、分析の意図を把握し、分析結果の検証をするための基礎資料として作成した。

選択基準：付録部分を含み原典に掲載されている図表に採用されている項目を選び出し、アルファベット順に配列したもので、下記のものが該当する。

- 図の縦軸または横軸の数値として使用されている項目名
- 図の中にプロットされている項目名
- 表に記載されている変数名

対象とした項目は基礎データである世界価値観調査の質問項目およびその加工値（例えば、Post-materialist Values）、もしくはそれらとの関係をクロス分析するために用いられた経済指標（例えば、GNP per capita）・政治指標（例えば、Years democratic）などで、表記上はスペースの制約で英文・日本語訳とも短縮化したものもある。

用語解説：

- 1 (掲載図) Fx-xx は図の番号に、Tx-xx は表の番号に対応し、@はその図の掲載個所が付録部分にあることを示している。
- 2 (章・頁) 掲載図表の前後の解説個所で当該項目に触れた部分を原典の章・頁で表現する。なお、序章から第二章の終わりまでは原典の頁が通じで付けられているので、そのままの頁数を採用した。第九章と第十章も原典の頁は通し番

号になっているが、他の章の頁はその章の中で完結している。

3 (図表タイプ) 採用された項目が参照されている図表上で表現されている内容を簡潔に記載した。二つ以上の項目が一つの図に表現されている場合、それぞれその項目から見ての表記のため、同一図表でも項目によっては「図表タイプ」の記載が異なる場合もある。

4 (表示単位) 掲載図表上の単位を表し、「数値」・「%」・「区分」に分かれ。 「数値」は一般的な連続的な数量で表されるもの、「%」は構成比・的中率のようにその単位がパーセントとなるもの、「区分」はその項目をカテゴリーとして他の項目の数値・%の違いを対比させているものである。なお、図10-19は「数値」を対数化して表示している。

5 (1990世界価値観調査) 当該項目が1990年世界価値観調査の質問項目を基礎データとしているものについて、「属性」「質問#」、「加工#」を記載した。「属性」は質問項目もしくはそれを加工したものの性格を示し、Y/N は質問が Yes/No の選択を求めているものを意味する。

n 段階は質問が n 段階の尺度での答えを求めるもの。Yes/No 型質問であっても選択肢に「どちらでもない」という中間タイプが用意されている場合には Y/N ではなく、3 段階と表記している。

n 択は「n 者択一」の意味で、必ずしも一つの次元上の段階的な尺度として表せないものを選択肢として「一つ」を選ばせるもの。

指数は調査項目の原データを加工して指数化したもの指す。例えば、Affect balance は V84 から V93までの十項目の回答に基づいてインデックス化したもので、同様に指数化したものは、他に Achievement Motivation、Ethno-linguistic fractionalization、Materialist/Postmaterialist values がある（これらについてのそれぞれの厳密な定義は Appendix 4 を参照のこと）。なお、Class voting で使用されている Alford class voting index は第八章の14 頁に説明されているように、労働者階級の左翼への投票率から中産階級の同投票率の差で表される。

「順位」は三組十二項目の物質主義・脱物質主義価値優先のテストに使用されたもので、それぞれの組の四項目から上位二つを選択する形態であることを示す。

6（それ以外）当該項目のデータが世界価値観調査以外の調査・資料に基づいているもので、そのデータの「属性」と「出所」を記載した。

分析対象項目索引 (ITEM LIST)

Words & Phrases	日本語訳	日本語訳	章	頁 図表タイプ	1990世界価値観調査	それ以外
			表示単位	属性	質問#	属性
Abortion ok	中絶可		F3-2 T9-1 F9-1 F9-3 F3-1 F3-2 F7-1 T7-1	3 15 因子負荷量マップ (脱)物質主義指數と相関 (脱)物質主義ア別比率 9 7 国別変化-1981~90 近代化から脱近代化への概念図 3 15 因子負荷量マップ 7 3 実質経済成長率との国別散布図 7 15 1人当たり経済成長率を 従属変数とする回帰分析	10段階 % 10段階 % 10段階 % 10段階 -	V309 V309 V309 V309 V1046 V1046 V1046
Achievement motivation 成功動機			F7-2 F3-2 F5-6 T9-1 F9-13	7 16 経済・文化変数関連図 3 15 因子負荷量マップ 5 17 経済成長と国別散布図 (脱)物質主義指數と相関 9 10 国別変化-1981~90	数値 数値 数値 数値 数値	V1046 V1032 ガンマ[V1010]に基づく - %
Affect balance 感情バランス			F9-15@ T9-1 F9-17@ T9-1 F9-16@ T9-1 F9-18@ F3-2	9 11 国別変化-1981~90 (脱)物質主義指數と相関 9 11 国別変化-1981~90 (脱)物質主義指數と相関 9 11 国別変化-1981~90 (脱)物質主義指數と相関 9 11 国別変化-1981~90 3 19 因子負荷量マップ	- - - - - - -	Y/N Y/N Y/N Y/N Y/N Y/N Y/N
Age and values 年齢と価値観			T9-1 F9-1 T9-1 F9-1 T9-1 F9-1 T9-1 F9-24	神を信じる 天国を信じる 地獄を信じる 罪を信じる 子供には両親必要 (脱)物質主義指數と相関 13 国別変化-1981~90 (脱)物質主義指數と相関	- - - - - -	V166 V166 V171 V171 V170 V170 V170 Y/N
Attend church 教会への出席			F9-20@ F9-21@ F9-22@ F9-30 T10-1 F8-8	9 11 国別変化-1981~90 9 11 国別変化-1981~90 9 11 国別変化-1981~90 9 16 変化方向-国単位の中率 変化方向の約中率 12 国別時系列分析	- - - - -	V172 V172 V172 V214 V214 V214 V214 V152-155 V152 V153 V154 [該当項目使用] [該当項目使用]
Authority dimension 権威の次元 [Rational-legal/Trad'l] [合理・合法的/伝統的]					数値	数値
Believe in god 神を信じる						
Believe in heaven 天国を信じる						
Believe in hell 地獄を信じる						
Believe in sin 罪を信じる						
Child needs both parents 子供には両親必要						
Church can answer problems 教会の問題解決						
-Moral problems - 道徳的問題						
-Family life - 家庭生活の問題						
-Spiritual needs - 精神的欲求						
Civil norms 市民としての規範						
Class voting 社会階級投票						

Alford指数[Lipsetなど]

分析対象項目索引 (ITEM LIST)

Words & Phrases	日本語訳	章 掲載図	頁 図表タイプ	1990世界指標調査 属性	質問#	加工#	属性	それ以外 出所
Comfort from religion		T9-1 F9-19@	9 11 (脱)物質主義指数と相関 変化方向の内中率	- Y/N	V177			
Confidence in institutions	公共団体への信頼	T10-1 T9-1 F10-2 T9-1 T10-3@ T9-1 F10-1	10 21 (脱)物質主義指数と相関 (脱)物質主義指数と相関 (脱)物質主義指数と相関 (脱)物質主義指数と相関 10 21 (脱)物質主義指数と相関 (脱)物質主義指数と相関 10 21 (脱)物質主義指数と相関	% % - % - % - %	V177 [該当項目使用] V273 V273 V272 V272 V272 V278 V278			
-Armed forces	軍隊への信頼							
-Churches	教会への信頼							
-Police	警察への信頼							
Democracy	民主主義	F10-5 T6-1,2, 8,8A,9,10 F6-6 T6-1,2, 6,7,8A T6-1~5	10 23 満足度の時系列分析 とする回帰分析 国別変化度マップ 6 18 民主主義水準変化を從属変数 とする回帰分析 国別変化度マップ 6 18 民主主義水準を從属変数 とする回帰分析 6 18 民主主義安定度を從属変数 とする回帰分析	% % % % % % %				
-Change in level	- 変化度							
-Level of	- 水準							
-Stability of	- 安定度							
-Years democratic	- 繙続年数	F3-4 F6-2	3 28 因子 I / II との相関係数 「他人を信頼」の比率 との国別散布図	数值 数值 数值				
Democratic/non-democratic		F6-3 F6-5 F6-8	6 15 主観的幸福指数との国別散布図 累積組織参加率との国別散布図 脱物質主義指數[%]との 国別散布図	数值 数值 数值				
Detrmination	民 主主義・非民主主義 決断力	F6-1 F3-2 F3-2 T9-1 F10-9 F10-4	6 1 GNP/人階層別構成比率 3 17 因子負荷量マップ 因子負荷量マップ (脱)物質主義指数と相関 10 27 国別変化-1981~90 10 22 時系列分析	% 数値 数値 数値 - 3段階 % 3段階	V233 V10 V10 V10			R. D. Gastil
Discuss politics	政治談義							
Distrust of government	政府不信							
Divorce ok	離婚可							
		T9-1 T9-4	9 8 国別変化-1981~90	%	10段階 10段階 10段階	V310 V310 V310		Univ. of Mich NES他

Ecology	エコロジー	F3-2	3	19 因子負荷量マップ	数値	4段階	V290	成長率
Economic growth	経済成長	F3-4	3	27 因子 I / II との相関係数元	数値	順位	V257&258	T4-2は1973/78 EC調査
		T4-1~8	4	(脱)物質主義価値観次元 抽出のための因子分析	数値	順位	V257&258	T4-3&4はオーストラリア調査
		F5-6	5	13 年齢・価値観対応関係 との国別散布図	%	数値	V1053	成長率(1950-88) 世界銀行データ
Employee-owner management	従業員・オーナー経営	F7-1	7	1 成功動機指數と国別散布図	%	数値	V126	成長率(1960-90)
		F7-2	7	16 経済・文化変数関連図 (脱)物質主義指數と相関	-	四択	V126	世界銀行データ
Environmental protection	環境保護	T9-1	10	33 国別変化-1981~90	%	四択	V126	成長率(1960-90)
Ethnolinguistic fract	人種・言語による分裂	F10-16@	8	5 脱物質主義目標選択数による比較	%	4段階	V12&13	世界銀行データ
		F8-1	8	25 民主主義を從属変数とする回帰分析	数値	指数	V1053	成長率(1950-88) 世界銀行データ
Euthanasia	安樂死	T9-1	9	8 (脱)物質主義指數と相関	-	10段階	V312	成長率
Extramarital sex	不倫	F9-9@	9	8 国別変化-1981~90	-	10段階	V312	成長率
		T9-1	9	(脱)物質主義指數と相関	-	10段階	V304	成長率
Family important	家族は重要	F9-8@	9	8 国別変化-1981~90	-	10段階	V304	成長率
		F3-2	3	16 因子負荷量マップ	数値	4段階	V5	成長率
Fertility rate	出生率	F3-4	6	34 小麦[タイトルなし]	数値	4段階	V5	出生率
Fight against crime	犯罪との闘い	T4-1~8	4	1 (脱)物質主義価値観次元 抽出のための因子分析	数値	順位	V261&262	T4-2は1973/78 EC調査
Fight rising prices	物価上昇抑制	T4-1~8	4	1 (脱)物質主義価値観次元 抽出のための因子分析	数値	順位	V259&260	T4-3&4はオーストラリア調査
Fight with police	警官とけんか	T9-1	9	8 (脱)物質主義指數と相関	-	10段階	V311	成長率
Freedom > equality	平等より自由	F9-11@	9	8 国別変化-1981~90	-	10段階	V311	成長率
Freedom of speech	言論の自由	F3-2	4	1 (脱)物質主義価値観次元 抽出のための因子分析	数値	3段階	V247	成長率
Friend important	友人は重要	T4-1~8	4	1 (脱)物質主義価値観次元 抽出のための因子分析	数値	順位	V259&260	T4-2は1973/78 EC調査
GDP per capita	1人当たり国内総生産	F3-2	3	19 因子負荷量マップ	数値	4段階	V6	T4-3&4はオーストラリア調査
		F3-4	6	34 小麦[タイトルなし]	数値	4段階	V6	成長率
		T6-8A	3	26 因子 I / II との相関係数 民主主義を從属変数とする 回帰分析	数値	4段階	V6	成長率
F7-1	7	14 1人当たり経済成長率を 從属変数とする回帰分析	数値	V6	成長率	米ドル	成長率	
F8-10	8	17 左翼経済政策支持率との 国別散布図	数値	V6	成長率	ECU Inghart(1990)	成長率	

分析対象項目索引 (ITEM LIST)

Words & Phrases	日本語訳	章 頁 図表タイプ	表示 単位 属性	1990世界価値観調査 質問#	加工#	属性	それ以外 出所
@ : Appendix	掲載図	8 19 国有化支持力度との国別散布図	数値			米ドル	世界開発報告
GNP per capita	1人当たり国民総生産	F8-11 F2-2 F2-3 F2-4 F5-7 F6-1 T6-3~7、 9,10	8 2 2 2 5 6 7	平均寿命との国別散布図 主觀的幸福感との散布図 F2-3に対する関係一般化 脱物質主義指教との国別散布図 1 4区分別政治体制構成比 民主主義を從属変数とする回帰分析	数値 数値 数値 数値 数値 数値 数値	米ドル 米ドル 米ドル 米ドル 米ドル 米ドル 米ドル	世界開発報告 世界開発報告 世界開発報告
God is important	神は重要	F7-2 F10-19	7 11 16 経済・文化変数関連図 8 15 変化方向の予測的中率 との国別散布図	区 分 数値 区 分 数値 (対数)	米ドル 米ドル	世界銀行データ 世界開発報告	
God & evil are clear	善悪は明白	F3-2 T9-1 F9-1 F9-14 F3-2 F3-4 F8-9 T6-5、8、 8A、10	3 15 9 11 3 19 8 17 6	因子負荷量マップ (脱)物質主義指教と相関 (脱)物質主義タイプ別比率 国別変化1981~90 因子負荷量マップ 因子I / IIとの相関係数 OECD10カ国時系列分析 民主主義を從属変数と する回帰分析	数値 数値 % % 数値 数値 % 数値	V176 V176 V176 V176 V142 GNP比 GDP比 T. R. Cusack	
Government spending	政府歳出	F3-2 F3-2 T6-2~7、 9,10	3 3 6 20	因子負荷量マップ 因子負荷量マップ 民主主義を從属変数と する回帰分析	数値 数値 数値	Y/N Y/N V228	
Gradual reform	漸新的改革	Hard work Have free choice Higher education Homosexual ok Imagination In good health	勤勉 選択の自由 高等教育 同性愛可 金銭より知識の尊重 創造力 健康	18 国別変化1981~90 (脱)物質主義価値観次元 抽出のための因子分析 19 因子負荷量マップ 18 因子負荷量マップ	数値 数値 数値 数値 数値 数値	V95 V261&262 V230 V83	T4-2は1973/78 EC調査 T4-3&4はオーストラリア調査

Income equality	所得の平等	F3-4 T6-5、8、 8A、10	6	因子 I / II との相関係数と する回帰分析	数値 数値	上位20%集中度 上位20%集中度
Independence Interested in politics	独立 政治に関心	F3-2 F3-2 T9-1	10	因子負荷量マップ 因子負荷量マップ (脱)物質主義指數と相関 別変化-1981~90	数値 数値 — %	V227 V241 V241 V241
Investment	投資	F10-8 T7-1	7	13 1人当たり経済成長率を 從属変数とする回帰分析	数値 数値	4段階 4段階
Jobs to own nationality	仕事は自国民に	F7-2 F3-2 F8-4	7	16 経済・文化変数関連図 因子負荷量マップ	数値 数値 %	V130 V130 V130
Left economic policy Left-right ideology	左翼的経済政策 左右のイデオロギー	F8-10 F8-3 F8-6 T9-1 F10-18	8 8 8 10 10	17 GOP/人との国別散布図 ドイツ政党マッピング フランス政党マッピング (脱)物質主義指數と相関 別変化-1981~90	数値 数値 数値 — %	V248 V248 V248 10段階 10段階
Leisure important	余暇は重要	F3-2	3	19 因子負荷量マップ 34 小妻タイトルなし】	数値 数値	V248 V7
Less impersonal society	より人間的な社会	T4-1~8	4	17 (脱)物質主義価値観次元 抽出のための因子分析	数値	V261&262
Life expectancy	平均寿命	F2-2 F3-4 F3-2 F6-4 T4-1~8	2 3 3 6 4	58 GNP/人と国別散布図 因子 I / II との相関係数 因子負荷量マップ 国別時系列 (脱)物質主義価値観次元 抽出のための因子分析	数値 数値 数値 数値 数値	T4-2は1973/78 EC調査 T4-3&4はオーストラリア調査 歳 歳 歳 歳 歳
Life satisfaction	生活に満足	F6-4	6	16 国別時系列	数値	% ユーロ・バローメータ調査
Maintain order	秩序の維持	T4-1~8	4	1 (脱)物質主義価値観次元 抽出のための因子分析	数値	T4-2は1973/78 EC調査
Materialist/postmat—	物質主義・脱物質主義	T4-1~7	12	項目の優先順位による因子分析-インド以外	数値	T4-3&4はオーストラリア調査
	T4-8	12	項目の優先順位による因子分析-インド	数値	V257-262	
	F5-1 F5-2	5 5	16 年齢階層別価値観タイプ 【インフレ率と比較】	数値 数値	% 差 EC調査	
	F5-3 F5-4	5	14 コート別時系列分析 時系列と長期傾向線	指數	% 差 EC・米国調査	
	F6-7	6	37 政治行動経験・意識率比較 区分	V1000	% 差 EC調査	

分析対象項目索引 (ITEM LIST)

Words & Phrases	日本語訳	掲載図	章	頁	図表タイプ	表示単位	属性	1990世界価値観調査 質問#	加工#	それ以外 属性	出所
Meaning/purpose of life	生きることの意義目的	F8-12			民間化支持率比較	区分	指数	V1000			
		T9-1			相関関係のある変数のリスト	区分	指数	V1000			
		F9-1			各規範支持率比較	区分	指数	V1000			
Money	金銭	F9-23	9	13	(脱)物質主義指數と相関	-	4段階	V133			
More beautiful cities	都市の美化	F3-2	3	19	因子負荷量マップ	%	4段階	V133			
More say in government	政府にもっと意見を	T4-1~8	4	3	(脱)物質主義価値観次元抽出のための因子分析	数値	10段階	V264	T4-2は1973/78 EC調査		
More say on job	仕事について発言	T4-1~8	4	17	(脱)物質主義価値観次元抽出のための因子分析	数値	順位	V257&258	T4-3&4はオーストラリア調査		
National pride	国家に誇り	F3-2	3	16	因子負荷量マップ	数値	順位	V259&260	T4-2は1973/78 EC調査		
Not happy	不幸	F10-6	10	23	(脱)物質主義指數と相関	数値	10段階	V257&258	T4-3&4はオーストラリア調査		
Obedience	従順	F3-2	3	15	因子負荷量マップ	%	10段階	V322	T4-2は1973/78 EC調査		
Organizational membership	ボランティア組織参加	F3-2	3	16	因子負荷量マップ	数値	4段階	V18	T4-3&4はオーストラリア調査		
		F6-5	6	24	民主主義継続年数との国別散布図	数値	Y/N	V236	T4-2は1973/78 EC調査		
		T6-5,10	6	26	民主主義を從属変数とする回帰分析	数値	Y/N	V19-54	T4-3&4はオーストラリア調査		
Owner's choice of managers	オーナーによる経営者任命	T9-1			(脱)物質主義指數と相関	四択	V126				
Parent-child ties	親子の絆	F10-17@	10	32	国別変化-1981~90	%	四択	V126			
Party program	政党政策	F9-30	9	16	変化方向-国単位の中率	%	〔該当4項目使用〕				
Per capita economic growth	一人当たり経済成長	T10-1			変化方向の的中率	%	〔該当4項目使用〕				
Per capita income	一人当たり所得	F8-7	8	12	時代別特定政策公約数	数値	V19-54				Klingemann et al
		T7-1	7	13	経済・文化変数による回帰分析	数値					
Political action/behavior	政治的活動	F5-8	5	19	脱物質主義者比率との散布図〔スペイン地域別〕	数値					ペセタ J. D. Nicolas
-Boycotts	- ボイコット	F6-7	6	37	(脱)物質主義タイプ別比率	%	3段階	V242-246			
		T9-1			(脱)物質主義指數と相関	-	3段階	V242-246			
		T10-1			変化方向の的中率	%	〔該当項目使用〕				
		F10-11	10	29	国別変化-1981~90	%	3段階	V243			

-Demonstrations	- デモ	F10-12	10 29 国別変化-1981～90	% 3段階 V244
-Unofficial strikes	- 非合法スト	F10-13@	10 29 国別変化-1981～90	% 3段階 V245
-Occupying buildings	- 建物・工場占拠	F10-14@	10 29 国別変化-1981～90	% 3段階 V246
Political party programs	政党政策	F8-7	8 12 賛成	
Politics important	政治は重要	F3-2	3 17 因子負荷量マップ	数値 4段階 V8
Postmaterialist values	脱物質主義的価値	F3-1	6 34 小表[タイトルなし]	数値 4段階 V8
		F3-2	3 15 因子負荷量マップ	数値 4項目指數/ 12項目指數 or 1010
		F5-5	5 14 7カ国のコードホート別分布	% 12項目指數 V1010
		F5-7	5 18 GNP/人との国別散布図	% 12項目指數 V1010
		F5-8	5 19 1人当たり所得との散布図 [スペイン地域別]	% 12項目指數 %差 J. D. Nicolas
		T5-1	5 19 1981-90国別転換度	% 12項目指數 V1010 1981米国はNES調査
		F6-8	6 38 民主主義継続年数との 国別散布図	% 12項目指數 V1010
		T7-1	7 15 1人当たり経済成長率を 従属変数とする回帰分析	数値 4項目指數/ 12項目指數 or 1010
		F8-1	8 5 環境保護指數比較	区分 12項目指數 V1010
		F8-2	8 6 緑の政党投票意向比較	区分 12項目指數 V1010
		F8-4	8 7 自国民優先賛成率比較	区分 12項目指數 V1010
		F8-5	8 8 移民嫌悪率比較	区分 12項目指數 V1010
		T10-1	变化方向の的中率	% 4/12項目指數 V1010
		FA-1	@1 7 時系列分析-デシマーク	%
		T7-1	1人当たり経済成長率を 従属変数とする回帰分析	数値
Primary education	初等教育	F8-11	8 19 GDP/人との国別散布図	数値 10段階 V251
		F8-12	8 19 (脱)物質主義タイプ別比率 (脱)物質主義指數と相関	% 10段階 V251
		T9-1		- 10段階 V308
		F9-6@	9 8 国別変化-1981～90	% 10段階 V308
		F3-2	3 17 因子負荷量マップ	数値 3段階 V151
		F3-2	3 20 因子負荷量マップ	数値 Y/N V69-82
		F8-5	8 8 脱物質主義目標選択数 による比較	% Y/N V77
Private ownership	民間企業	F3-2	2 57 米国例引用	%
Prostitution	売春	3 16 因子負荷量マップ	数値 4段階 V9	
R. is religious	宗教心	6 34 小表[タイトルなし]	数値 4段階 V9	
Reject outgroups	外集団拒否	F3-1		近代化から脱近代化への概念図
Religion important	宗教は重要			
Religious & communal values	宗教的・地域的価値観			

分析対象項目索引 (ITEM LIST)

項目名	説明	章	頁	図表タイプ	1990世界価値観調査 属性	質問#	加工#	属性	それ以外 属性	出所
Words & Phrases	日本語表現	掲載回	9	16 変化方向-国単位的中率	% [該当項目使用]					
Religious norms	宗教的規範	F9-30	3	変化方向-国単位的中率	% [該当項目使用]					
Respect authority	権威の尊重	T10-1	3	因子負荷量マップ	3段階	V268				
		F9-2	3	因子負荷量マップ (脱)物質主義指數と相関	-	V268				
		T9-1	9	5 国別変化-1981~90	%	V268				
		F9-2	9	変化方向-国単位的中率	%	V268				
		F9-30	9	変化方向-国単位的中率	%	V268				
Respect parents	両親を尊敬	T10-1	3	変化方向-国単位的中率	%	V268				
		F9-2	3	因子負荷量マップ	Y/N	V224				
		T9-1	9	14 国別変化-1981~90	-	V224				
		F9-27@	9	因子負荷量マップ (脱)物質主義指數と相関	-	V224				
Responsibility	責任感	F9-2	3	因子負荷量マップ	%	V229				
Revolutionary change	革命的	F9-2	3	因子負荷量マップ	三択	V249				
		T6-5,10	6	民主主義を從属変数と する回帰分析	三択	V249				
Scarcity/Postmodern dim	欠乏・脱近代次元	FA-2	@1 7	因子得点国別マップ	数値					
Secondary/higher education	中等・高等教育	F9-3	3	因子 I / II との相関関係	数値					
		T7-1	7	15 1人当たり経済成長率を 從属変数とする回帰分析	数値					
Service sector	サービス部門	F7-2	7	16 経済・文化変数関連図	数値					
		F3-4	3	因子 I / II との相関関係	数値					
		T6-2~7、 9,10	6	19 民主主義を從属変数と する回帰分析	数値					
Sex under legal age	法定結婚年齢前のセックス	T9-1	9	16 変化方向-国単位的中率	% [該当項目使用]					
		F9-7@	9	因子負荷量マップ	10段階	V305				
Sexual & marital norms	性・結婚に関する規範	F9-30	9	国別変化-1981~90	-	V305				
		T10-1	9	変化方向-国単位的中率	% [該当項目使用]					
Sign petition	請願への署名	T9-1	10	27 国別変化-1981~90	%	V242				
Single parentfood	未婚の母	F9-26@	9	13 国別変化-1981~90	-	V242				
		F9-28	9	14 未婚の親といふ子供-BC	%	V217				
		F9-29	9	未婚の母の産んだ子供-BC	%	V217				
Stable economy	経済安定	T4-1~8	4	1 (脱)物質主義価値観次元 抽出のための因子分析	順位	V261&262				

米国国勢調査局
EC統計室
T4-2は1973/78 EC調査
T4-3&4はオーストラリア調査

State/gov't ownership 国有化	F3-2	3	20 因子負荷量マップ (脱)物質主義指數と相関	10段階 数値	V251
	F8-11	8	19 GDP/人との国別散布図	10段階 数値	V251
State responsible 国家責任	T9-1	10	32 国別変化-1981~90 変化方向の的中率	%	10段階 V251
	F10-15	10	32 国別変化-1981~90 変化方向の的中率	%	10段階 V251
State/employees management 国家・社員経営	T10-1	3	20 因子負荷量マップ (脱)物質主義指數と相関	10段階 数値	V252
	F3-2	3	20 因子負荷量マップ (脱)物質主義指數と相関	10段階 数値	V126
Strong defence force 強力な防衛力	F3-2	3	20 因子負荷量マップ (脱)物質主義指數と相関	10段階 数値	V257&258
	T4-1~8	4	1 (脱)物質主義指數と相関 抽出したための因子分析	順位	T4-2は1973/78 EC調査 T4-3&4はオーストラリア調査
Subjective well-being 主観的幸福感	F2-3	2	60 GNP/人との国別散布図 F2-3に対する関係一般化	% 指数	V18&95
	F6-3	6	15 民主主義継続年数との 国別散布図	% 指数	V18&95
Suicide 自殺	T6-1、 3~7、 T9-1	6	18 民主主義を從属変数と する回帰分析 (脱)物質主義指數と相関	数値	V18&95
	F9-10@	9	8 国別変化-1981~90 因子負荷量マップ	-	10段階 V313
Survival/Well-being values 生存・幸福価値観	F3-2		因子得点国別マップ 経済・社会変数との相関	-	10段階 V313
	F3-3		因子得点国別マップ 経済・社会変数との相関	数値	因子II
Technology 技術	F3-4		9 国タイプ別変化方向対比	数値	因子II
	F11-1	11	19 因子負荷量マップ 経済・社会変数との相関	% [該当項目使用]	3段階 V266
Thrift 儉約	F3-2	3	17 因子負荷量マップ 経済・社会変数との相関	数値	V232
	F3-2	3	17 因子負荷量マップ 経済・社会変数との相関	数値	V231
Tolerance 審容	F3-2	3	17 因子負荷量マップ 経済・社会変数との相関	数値	V231
	F3-2	3	17 因子負荷量マップ 経済・社会変数との相関	数値	V231
Traditional/Rational-legal 伝統/合理合法的權威	F3-3		因子得点国別マップ 経済・社会変数との相関	数値	因子I
	F3-4		因子得点国別マップ 経済・社会変数との相関	数値	因子I
Trust People 他人を信頼	F3-2	3	20 因子負荷量マップ 経済・社会変数との相関	数値	Y/N V91
	F6-2	6	12 民主主義継続年数との 国別散布図	% Y/N	V91
Trust science 科学を信頼	T6-1、 3~7、 T9-1	6	18 民主主義を從属変数と する回帰分析 (脱)物質主義指數と相関	数値	Y/N V94
	F10-7	10	25 国別変化-1981~90 変化方向の的中率	% Y/N	V94
Using marijuana マリファナ使用	T10-1		19 因子負荷量マップ (脱)物質主義指數と相関	% Y/N	V94
	F3-2	3	19 因子負荷量マップ (脱)物質主義指數と相関	数値	3段階 V271
Using marijuana マリファナ使用	T9-1		8 国別変化-1981~90	-	10段階 V301
	F9-12@	9	8 国別変化-1981~90	-	10段階 V301

分析対象項目索引 (ITEM LIST)

Words & Phrases	日本語訳	掲載図	章	頁	図表タイプ	1990世界価値観調査 質問#	加工#	属性	それ以外	出所
Vote for Greens	緑の政党への投票	F8-2	8	6	脱物質主義目標選択数 による各国別比較	%	V351&352			
Want many children	たくさんのお供	F3-2	3	16	因子負荷量マップ	11段階	V213			
Woman needs children	女性は子供必要	F3-2	3	19	因子負荷量マップ (脱)物質主義指數と相関	Y/N	V215			
		T9-1			(脱)物質主義タイプ別比率	-	V215			
		F9-1			(脱)物質主義タイプ別比率	%	Y/N	V215		
		F9-25@	9	13	国別変化-1981~90	%	Y/N	V215		
Women's movement	女性運動	F3-2	3	20	因子負荷量マップ	4段階	V294			
Work important	仕事は重要	F3-2	3	16	因子負荷量マップ	4段階	V4			
		6	34	小表[タイトルなし]	4段階	V4				

(加藤敬子)

@ : Appendix

Toward a Secondary Analysis of the World Values Survey Data (II)

ABSTRACT

The purpose of this study is to evaluate the data from the World Values Survey which has recently attracted global attention. The 1990 version of this survey was conducted in 43 nations under the supervision of Ronald Inglehart at the University of Michigan. That university has established an international reputation for its social science data collection, management, and analysis. This paper will first explain the contributions of the University of Michigan through its Center for Political Studies and Inter-University Consortium for Political and Social Research. Because one of the most critical aspects of any empirical study is to the ability to confirm the results through replication, the second part of this paper will evaluate the data used in Inglehart's World Values Survey and make cross-national comparisons of values and attitudes using the mode of responses. Finally, the "Item List" which we have developed, is designed to evaluate the analysis done in Inglehart's study entitled, "Modernization and Post modernization."

Key Words : Secondary Analysis, Modal Analysis, Item List